

荷風とモーパッサン

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

58

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

278

(終了ページ / End Page)

201

(発行年 / Year)

2012-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021124>

荷風とモーパッサン

宮 永 孝

はしがき

- 一 暁星中学附属仏語専修科
- 一 丘の街タコマ
- 一 森の中の小さい町カラマズー
- 一 ワシントン暮色——娼婦イデイス
- 一 憧憬の地フランスへ
- 一 霧の町リヨン

- 一 明治期のモーパッサン紹介
 - 一 荷風の蔵書
 - 一 荷風のフランス語
 - 一 荷風のモーパッサン作の訳業について
 - 一 荷風に及ぼせるモーパッサンの影響
- 小品「葡萄棚」と*Les Tombales*（「墓場の女」）との関係

はしがき

世事をはなれて自由奔放に暮らす人のことを「散人」という。小説家・永井荷風（一八七九—一九五九）は、「荷風散人」の異名をとった。荷風が逝ってもう半世紀以上になる。かれは七十九歳を一期として、市川市八幡町の小さな自宅で吐血により亡くなるまで、世間一般の考え方、生き方に背をむけて暮らした。

金を愛し、人をきらい、独居を愛したこの文化勲章の文豪は、さいごの反俗作家であった。⁽¹⁾ 晩年、中折帽子をかぶり、背広を着、こうもりガサとボストン・バッグをもって外出した荷風は、世間のどこにでもいる老人であった。が、街でこの人物とすれ違うことがあっても、男女間の愛や性愛をテーマとする大作家であることに気づく者はすくなくかった。



晩年の永井荷風

それにしても荷風ほど波瀾に富んだ一生をおえた文士もすくない。明治三十一年（一八九八、十九歳）牛込矢来町の広津柳浪（一八六一〜一九二八、明治期の小説家）の門に入ったのを振りだしに、翌年には落語家の弟子となり、三遊亭夢之助を名のり、席亭に出入りし、のち落語家修業を断念した。

明治三十三年（一九〇〇、二十一歳）、福地源一郎（一八四一〜一九〇六、明治期のジャーナリスト、号は桜痴）の門に入り、歌舞伎座の作者部屋に出入りし、拍子木を入れる勉強をはじめた。その間外国語学校は除籍になっていた。翌年四月、『日出国新聞』の雑報記者となるが、連載した「新梅こよみ」（四〜五月）が不評であったことや社内の内

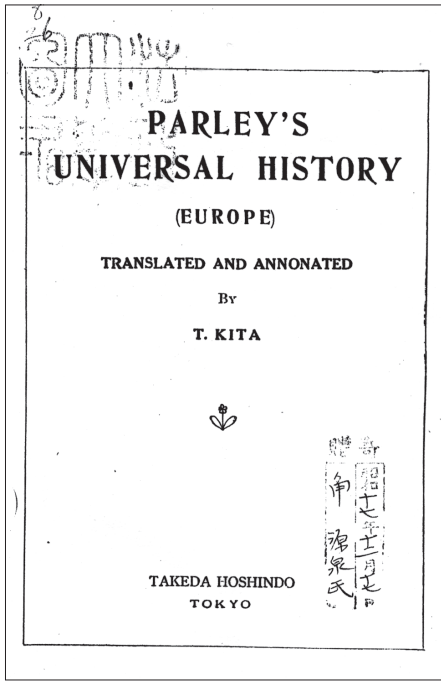
紛のため九月には解雇された。

このように変転きわまりない生活を送るうちに、飯田町三丁目の暁星中学の夜学でフランス語の勉強をはじめた。そもそもかれがフランス語を学ぼうとおもったのは、ギイ・ドゥ・モーパッサン（一八五〇〜一九三三、フランスの小説家）の文章を英訳によらず、原文の一字一句を、じぶんの舌で発音し。味わってみたいと思ったからである（「モーパッサンの石像を拝す」）。

広津柳浪（一八六一〜一九二八）は、人生の暗黒面を写実的に描写する手法を得意とし、若き日の荷風もその作風に敬服していた。が、やがて柳浪の花柳小説では満足できなくなり、外国文学の中に清新味をもとめようとした。

人生の暗部や人間の獣性、性愛を好んで小説のテーマとしたのはエミール・ゾラ（一八四〇〜一九〇二、フランスの小説家）であり、荷風もモーパッサンに傾倒するまえに、ゾラの作品を英訳でよみ、いくつか批評や紹介文を発表した。

荷風はゾラ熱にかかり、ゾラに心酔したのち、モーパッサンの文学に移行する前段階として、フランス語の学習に手を染めるのである。



パーレーの『万国史』の表紙。
〔法政大学附属図書館蔵〕

ここで荷風の学歴をかいつままで記すと、かれはけっして劣悪な教育をうけたわけではなく、むしろ恥しくない、ちゃんとした学校に学んでいる。荷風は、愛知県士族・永井久一郎（帝国大学書記官、文部省会計局長を経て日本郵船の重役）と尾張の著名な漢詩人・鷺津宣光（号は毅堂、

一八二五〜八二二、藩主侍読のち東京学士院会員）の次女である恆（つね）の長男として生れており、血筋がよいのである。

小石川区黒田小学校尋常科第四学年を卒業後、東京府尋常師範学校附属小学校高等科を経て、神田一ツ橋の高等師範学校附属学校尋常中学校（六年制、当時は良家の子弟が通った）の第二学年に編入学した。同校第五学年を卒業後、第一高等学校を受験したが不首尾となり、一時神田錦町の英語学校に通った。ついで神田一ツ橋の高等商業学校附属外国語学校清語科に臨時入学したが、のちに退学した。

英語は高等小学校の三、四年生ころから学び、教科書はアメリカの『ナショナル・リーダー』であった。中学校では文部省で編んだ英語読本を用い、日本人教師から訳読を習ったという。

マコレーのクライフ伝

パーレーの『万国史』

フランクリンの『自叙伝』

ゴールドスミスの『ウェークフィールドの牧師』

パリの屋根裏の学者の英訳本 [Émile Souvestre [1806〜1834] の *An attic philosopher in Paris* のことか。菅野徳助と奈倉次郎の訳註本『巴里屋根裏の哲人』〔三省堂、明治41〕がある]

神田錦町の東京英語学校へ通っていたとき、はじめてディケンズの小説をよんだという（「十六七のころ」『随筆 冬の蠅』所収、扶桑書房、昭和20・11）。

前置きは長くなったが、本稿はモーパッサンに師事し、その作品を愛読することによってしだいに感化をうけ、意図的または無意識にじぶんの短篇作品の発想や構成、描写などに、先師の技巧を応用したと考えられる荷風とモーパッサンとの関係について論じたものである。

一 暁星^{あきほせい}中学附属仏語専修科。

荷風（二十二歳）がスータン（通常服）を着たカトリックの坊さんが教える暁星中学内のフランス語課程に入学したのは、明治三十四年（一九〇一）九月のことであり、この専修科は夜学であった。この夜学校についての資料はひじょうに少ないようだ。いま乏しい材料をもとにこの夜学校について記してみよう。

私立暁星学校は明治十八年（一八八八）二月一日、つぎの五名の米仏人によって創立開校した。⁽²⁾

アルフォンス・ヘンリック師（仏人）……カンヌのリセの修辞学教師。のち校長になる。

（一八六〇〜？）

ジョゼフ・セネツ

（仏人）……アメリカのオハイオ州デイトン市の師範学校長。

（一八三八〜？）

ルイ・シュトルツ

（仏人）……アルザス州ランベリエ中学教師。

（一八五二〜？）

カミーユ・プランシュ

（仏人）……もとフランスの陸軍軍曹。のち師範学校の体育教師。

（一八五八〜？）

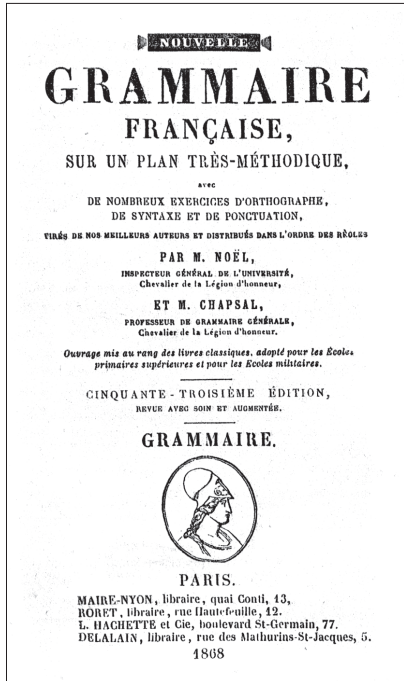
ニコラス・ワルター

（米人）……リセの教師をへて、パリのカトリック学院で神学を研究。

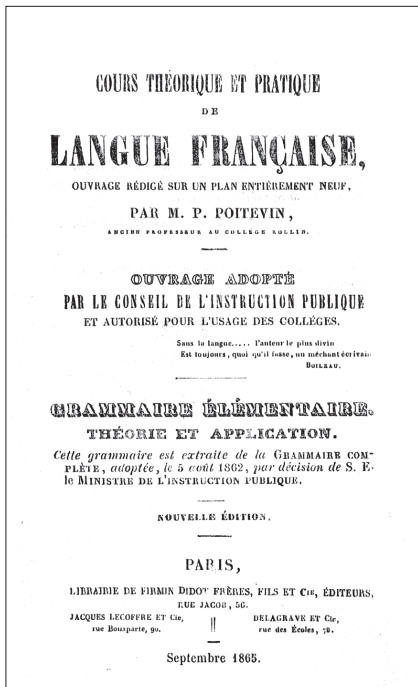
（一八六一〜？）

設立願によると、はじめ学校は、麴町区元藪町二丁目四番地に設けられ、⁽³⁾後年麴町区飯田町三ノ三二に移転した。

私立学校の設立願を役所に提出したとき、「外国語（仏・英・独）専修学校（夜間）」も同時に認可された。この語学専修科では、週に五時間習字・読方・文法・会話・書取・訳読・作文などをおしえた。



ハルトリー商会（横浜弁天通り93番地）が輸入したフランス文典（1868年刊）。〔筆者蔵〕



フランス文典（1865年刊）。〔筆者蔵〕

| | 〔著者〕 | 〔名称〕 | 〔発行年〕 | 〔冊数〕 |
|--|-------|--------|--------------|-------|
| | エス・エム | 仏文典 | 一八八七年（明治二十年） | 上中下三冊 |
| | 〃 | 仏文法温習書 | 一八八七年 | 〃 |
| | 〃 | 読本 | 一八八七年 | 〃 |
| | 〃 | 修身訓蒙 | 一八八六年 | 全一冊 |
| | 〃 | 作文規則 | 一八八六年 | 〃 |
| | 〃 | 古代アジア史 | 一八八七年 | 〃 |
| | 〃 | ギリシャ史 | 一八八七年 | 〃 |
| | 〃 | ローマ史 | 一八八七年 | 〃 |
| | 〃 | 中古史 | 一八八七年 | 〃 |
| | 〃 | 近世史 | 一八八七年 | （4）〃 |

フランス語関連では、正科および語学専修科でつぎのようなテキストを用いると報告している。

暁星学校が開講した当時、フランス本国からこれらの原書を取りよせて使用したと考えられるが、教場では明治二、三十年代（一八八七～一九〇六）にかけて翻刻本を用いた。

たとえば、フランス語の翻刻本とは、つぎのようなテキストである。

[上]

DES MÊMES AUTEURS:

COURS COMPLET

DE

LANGUE FRANÇAISE

~~~~~

COURS ÉLÉMENTAIRE.

佛語 初歩

3<sup>e</sup> ÉDITION

第三版

~~~~~

CHOIX

DE

LECTURES FRANÇAISES

ACCOMPAGNÉ

DE CENT QUATRE-VINGT-CINQ DEVOIRS.

~~~~~

佛記 撰 文

附百八十五宿題

注・同書の初版は明治二十九年（一八九六）十二月三十一日に発行された。発行者および編者は、暁星学校となっている。印刷所はジャパン・タイム



暁星学校の翻刻本『仏語初歩』増訂第4版（明治34年〔1901〕刊）。荷風はこのテキストを教わったと考えられる。〔法政大学附属図書館蔵〕



暁星学校の翻刻本『仏語初歩』第3版。〔法政大学附属図書館蔵〕

ス社。販売所は三才社である。

荷風が暁星中学校（認可は明治三十二年十月）の夜学においてフランス語の初歩をはじめて学んだのは、同校が編んだ翻刻版の Cours Élémentaire（『仏語初歩』）の第三版か第四版であったと考えられる。第四版（増訂第四版）は、荷風が夜学に入学した明治三十四年（一九〇一）に刊行されている。

COURS COMPLET  
DE  
LANGUE FRANÇAISE  
L'ÉCOLE de l'ÉTOILE du MATIN

---

COURS ÉLÉMENTAIRE  
佛語初歩

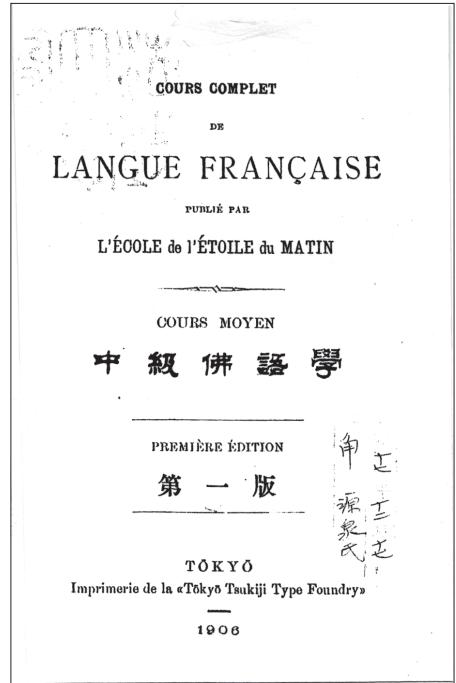
---

QUATRIÈME ÉDITION  
REVUE ET ENTIÈREMENT REFOUNDUE  
増訂第四版

---

TOKYO  
Imprimerie de la «Tokyo Tsukiji Type foundry»





暁星学校の翻刻本『中級仏語学』第1版、明治39年（1906）刊。〔法政大学附属図書館〕

1901

同書の「小引」(短いしがき)によると、このテキストは理論よりも実用に重きをおいて編んだものという。読者はこの本をおえたら、文法に重きをおいた『中級仏語学』によって研究すると有益であると述べている。暁星が編んだ『仏語初歩』は、第三版が四一頁、第四版が三五〇頁ある。

「増訂第四版」の構成は、文法と読み物と語いから成り、第四十一課までである。

[中]

COURS COMPLET

DE

LANGUE FRANÇAISE

PUBLIÉ PAR

L'ÉCOLE de l'ÉTOILE du MATIN

COURS MOYEN

中級佛語学

PREMIÈRE ÉDITION

第一版



暁星学校の翻刻本『上級仏語学』明治35年（1902）刊。〔法政大学附属図書館蔵〕

TOKYO

Imprimerie de la «Tokyo Tsukiji Typo Foundry»

1906

注・奥付によると、同書は明治三十九年（一九〇六）一月十日に発行された。発行者および編者は、暁星中学校となっている。定価は七〇銭。印刷所は東京築地活版製造所。販売所は三才社と中西屋書店である。

〔下〕

COURS COMPLET

DE

LANGUE FRANÇAISE

PUBLIÉ PAR

L'ÉCOLE DE L'ÉTOILE DU MATIN

COURS SUPÉRIEUR

(ANCIEN COURS MOYEN)

上級 仏語 学

(旧称中級仏語)

TOKYO

Imprimerie de la «Tôkyô Tsukiji Type Foundry»

1902

注・同書は明治三十五年（一九〇二）一月十日に発行された。発行者および編者は、暁星中学校となっている。定価は九〇銭。印刷所は東京築地活版製造所。販売所は三才社である。

暁星学校の夜学のフランス語課程がじっさいいつ始まったものかはっきりしないが、その運営は関東大震災直後の大正十二年（一九二三）十一月二十五日までつづいたとい<sup>(5)</sup>う。

この夜学について、同校はたびたび『東京朝日新聞』に広告を出している。たとえば、荷風が入学する前年——明治三十三年（一九〇〇）九月十七日の広告には、——

仏語夜学科

三学級共来<sup>ともきたる</sup>十七日始業。午後五時より六時まで教授す。入学望<sup>のぞ</sup>みの者は、至急申出<sup>もうしで</sup>らるべし。

麹町区飯田町三丁目中坂上<sup>なかさかうえ</sup>暁星中学校構内

九月十一日

この広告文によると、クラスは三つつあったものか。受講生は、午後五時から六時まで一時間、学んだようだ。おそらく、定員が満つるまで、無試験で入学を希望する者はだれでも入れたものであろう。しかし、一クラスの受講生数、月謝などに関しては明らかでない。同紙の広告文には時の経過とともに微妙な変化がみられる。

「暁星中学仏語夜学部 夜学開始」

(明治37・9・10付)

「暁星中学校内 仏語夜学部」

(明治39・9・15付)

「九段私立暁星中学校 仏語夜学科新学期開始」(明治40・9・15付)

つぎに掲げるものは、大正時代の広告である。

自 四月二十四日 至六月十二日・月曜木曜六時―八時。

暁星中  
学校内 仏蘭西語初歩夜学

池田文学士 三回独講 申込所 九段暁星中学校門衛

注・『東京朝日新聞』(大正11・4・18付)の広告。

**佛語夜學科** 三學級其來十七日始業  
 午後五時より六時まで  
 教授す入學望みの者へ至急申出らるべし  
 九月十一日 麹町區飯田町三丁目中坂上 暁星中學校構内

暁星の仏語夜学科の廣告。  
 (『東京朝日新聞』明治33・9・17付)より。

この廣告文は、どのように読むべきか。おそらくこの文の意味は、春期コースは、四月二十四日から六月十二日まで行なうというのであろう。授業は月曜と木曜の週二回、午後六時から八時までの二時間か。池田という文学士が三回講義するとあるが、これは入門者にフランス語のA B Cその他を教えるということか。そのあとフランス人の坊さんが直接教授法でフランス語を教えるということか。



黒田湖山『青春之詩』美育社、明治35・7より。



向軍治『三田評論』昭和37・1より。

ろう。

関東大震災がおこった年——大正十二年（一九二三）十一月一日付の広告（『東京朝日新聞』夕刊）は、「暁星学校 仏蘭西語夜学」である。そしてこれがさいごの広告となった。夜学のフランス語課程はこの年で廃止となったからである。

荷風は明治三十四年（一九〇二）九月に入学しているが、いつまで通ったものか明らかでない。かれが父親の勧めによって渡米するのは二年後の明治三十六年（一九〇三）十月のことであるが、この間暁星においてフランス語を習っていたかどうかははっきりしない。荷風は明治四十一年（一九〇八）七月十五日にアメリカとフランスの滞在をおえて神戸に帰着しているが、帰国後暁星中学校の夜間部でフランス語学習を再開した（中村星湖談）。暁星でふたたびフランス人宣教師からフランス語を学習したとき、荷風（二十四歳）といっしょに机をならべた同級生の中に、つぎのような人々がいる。

黒田湖山（一八七八〜一九二六）……本名は直道。小説家。滋賀県甲賀郡水口に生まれ、東京専門学校にまなぶ。巖谷小波の門下生で木曜会に属した。

キップリングの翻訳「狼少年」のほか、社会小説『大学攻撃』（明治35・6、美育社）、詩集としては『青春之詩』（明治35・7、美育社）などがある。

向軍治（一八六五〜一九四三）……山口県岩国市のひと。明治から昭和期にかけてのドイツ語学者。独逸学協会学校、新教神学校にまなんだ。陸軍

大学校教官（明治20）、東京農村学校教師（明治22）、早稲田大学の初代ドイツ語科教授、農科大学、四高、二高



パリ時代の藤田嗣治の肖像

中村星湖（一八八四〜一九七四）……明治から大正期にかけての小説家・評論家・翻訳家。山梨県南都留郡川口村のひと。

早稲田大学英文科にまなぶ。『早稲田文学』の記者となる。農民文学にも関心をしめした。のち昭和女子大学教授。暁星の夜学に入学したのは、明治四十一年（一九〇八）十一月であり、永井荷風・黒田湖山・向軍治がいっしょだったという（『中村星湖年譜』）。

教授をへて、福沢諭吉のすすめで慶應義塾の教授となりドイツ語を教えた。のち関西大学で教鞭をとったが、兵庫西宮市松下町の自宅で脳溢血のため逝った。

向はその名が示すように意気軒こうであり、向こう気がつよく、毒舌家であった。そのためこの学校も長つづきしなかったようである。ローマ字運動を展開したり、反戦論を主張したために憲兵に目をつけられ、相当きびしい圧力が加えられたが、ひるまなかった。

慶應時代、二〇〇円<sup>6</sup>（当時としては高給）の俸給のほとんどを丸善の本代に当てた。ドイツ語のほか、英語にもフランス語にも通じていた。誤訳にはとくにやかましく、鷗外訳を攻撃した。「山犬の如く吠<sup>ほえ</sup>掛<sup>か</sup>るわが文壇の誤訳詮義者」と永井荷風は評した。向は稀代の名物ドイツ語教授であったといえる。

その他、暁星の夜学でフランス語を習った者は数多いはずであるが、名の知られたところでは、与謝野寛（一八七三〜一九三五、明治から大正期にかけての歌人・詩人）、藤田嗣治（一八八六〜一九六八、大正から昭和期にかけての洋画家）、佐藤惣之助（一八九〇〜一九四二、大正から昭和期にかけての詩人）、西条八十（一八九二〜一九七〇、大正から昭和期にかけての詩人、早大教授「終戦の年退職」）などがある。

子どものころから「非凡の画才」にめぐまれていた藤田は、フランスに行っ

て洋画の修業するのが青年になってからの夢であった。その準備として何よりも語学をしっかりとやっておかねばならぬと思い、『お茶水の中学』（東京高等師範学校付属中学校——引用者）の四年頃 暁星学校の夜学に通い、三年で卒業の所を、三年級を二度も続けて都合四年間勉強したぐらいに熱中して修業した」という（藤田嗣治著『腕一本』東邦美術協会、昭和11・12）。

しかし暁星の夜学でみっちり学んだはずのフランス語は、パリに行ってみると、まったく役に立たなかった。夜学の坊さん教師の多くは、アルザス・ロレーヌ地方（ドイツの境界に近い）の出身であったから、かれらのフランス語は、田舎ことばであり、花の都のパリ娘には通じなかったという。

小学校をおえて麻布の糸商に奉公に出た佐藤惣之助は、十七歳の春、暁星の夜学に入り、二カ年間フランス語を学んだ（『日本近代文学大辞典』講談社、六八三頁）。西条八十が暁星で学んだのは早稲田の学生のとしか、近代英仏詩の交流に興味をもち、「フランス語が習いたくなり、暁星中学校の夜学に通いだした。同級生の中に、与謝野寛や佐藤惣之助の顔を見かけた」という（西条八十「私の履歴書」）。

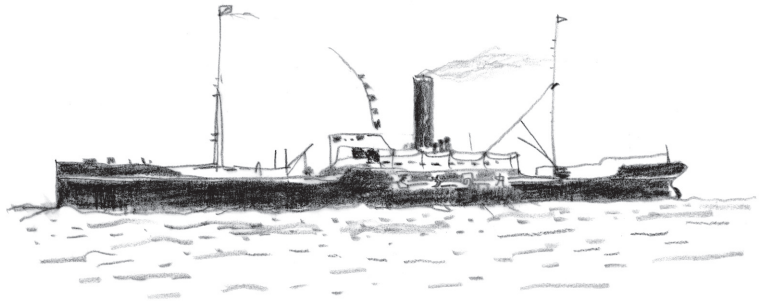
暁星の夜学でまなぶフランス語が、当時の荷風のフランス文学の読解やかれの創作にどれほど役立ったものか明らかでない。おそらく、一方ではフランスを学び、他方では主に英訳によってフランスの文芸作品に親しんでいたものであろう。

当初、荷風の心境を一変させたのはルーゴン・マッカル叢書のゾラであり、よみやすい英訳で一冊、また一冊とほとんど通読してしまった。読書もじぶんの性情（性質と心のなかの思い）に近いものをえらんで読むようになり、フランス文学がもっとも自己の性情に適しているように思った。当時、モーパッサンやピエール・ロチの作品を耽読した（「我が思想の変遷」）。

\*

#### 一 丘の街タコマ。

明治三十六年（一九〇三）秋——荷風は家庭の希望で、実業家となるためにアメリカに送られることになった。同年九月十七日、木曜会の送別会が清水谷皆香苑（千代田区紀井町の清水谷公園内にあった料亭）でひらかれ、同月二十二日——巖谷小波（二八七〇～一九三三）、押川春浪（二八七六～一九二四）、西村渚山（二八七八～一九四六）、生田葵山（二八七六～一九四五）ら木曜会のメンバーに見送られて——信濃丸（六三八八トン）にて横浜をあとにした。当日の空模様は「秋陰雨ならんとす」（「西進日記抄」）という。



荷風が渡米のときに乗った「信濃丸」

同船は日本郵船株式会社の太平洋航路の客船であり、明治二十九年（一八九六）以来、横浜とシアトル（アメリカ西部、ワシントン州西部の港町）間を往来していた。この船会社は、しょっちゅう主要新聞に「出帆広告」を出しているが、筆者がみつけた『朝日新聞』（明治36・9・22付）のものをつぎに掲げてみよう。

○「ヴェクトリア」、「シアトル」行

但し、右兩地に於て桑港（サンフランシスコ引用者）、「タマコ」、「ポートランド」紐育（ニューヨーク引用者）其他合衆国加奈陀（カナダ引用者）及欧州各地行汽車、汽船に接続するに付、各地通し切符を発売す。「米国行三等乗船申込は出帆当日三日前とす」横濱棧橋係留

信濃丸 廿二日午後二時横浜発

この出帆広告によると、信濃丸はヴィクトリアとシアトルの両港において、サンフランシスコ・タマコ・ポートランド・ニューヨーク、さらにヨーロッパへむかう汽船や汽車と接続しているという。途中で他の交通機関などに乗りつぐばあいも、目的地まで一枚の切符で通用する「通し切符」を発行するといっている。

三等船客（船底に近い船倉）を希望するものは、出帆の三日まえまでに申し出て欲しいとある。

信濃丸は、一月、四月、六月、九月、十二月と年に五回シアトルと横浜を往復した。末延芳晴著『永井荷風の見たあめりか』（中央公論社、平成9・11）に、『渡米成業の手引』（明治36）にみられる船賃が引いてある。それにはつぎのようにある。

一等（個室）……………片道三十一ポンド（約三〇〇円）

信濃丸

廿二日午後二時横浜発

○「ヴェクトリア」、「シアトル」行  
但右兩地に於て桑港、「タマコ」、「ポートランド」紐育其他合衆国加奈陀及欧州各地行汽車汽船に接続するに付各地通し切符を発売す「米国行三等乗船申込は出帆当日三日前とす」横濱棧橋係留

『朝日新聞』に掲載された日本郵船株式会社の汽船出帆広告。



Per Japanese steamer *Shinano Maru*, for Seattle, Wash., via Victoria, B.C.:—Mrs. M. Mur, Mr. Imamura, Mr. and Mrs. Y. Yamashita, Mr. T. Okahara, Mr. Wm. C. Keim, Mr. and Mrs. U. Otsuka, infant and amah, Mr. Y. W. Roberts, Mrs. P. Ransome, Mrs. K. Kameda, Mr. A. E. Collings, Mr. T. B. Kadly, Mr. F. P. Fell, Mr. A. M. Knapp and Mr. and Mrs. Leius in cabin; Mr. Robert Scott, Mr. T. Kando, Miss W. Kando, Mr. and Mrs. C. Hara, Mr. J. Ashikaga, Mr. S. Yamamoio, Mr. S. Kimura, Mr. T. Tamura, Mr. K. Ohashi, Mr. S. Kawaguchi, Mr. H. Matsuye, Mr. Y. Okita, Mr. Y. Hoshino, Mrs. M. Akiyama and Mr. S. Nagai in second class; 285 in steerage.

「信濃丸」の1等と2等の乗客名。さいごに荷風の名(S・Nagai)がみえる。The Japan Weekly Mail [1903・9・23付]より。

二等(なし)

特別三等(三段ベッド付の共同船室) ……片道十八ポンド (約一八〇円)

普通三等(出稼ぎ労働者用) ……? (約六五円)

このことはまだ誰もいったり、書いたりしていないと思われるが『ザ・ジャパン・ウィークリー・メール』紙(*The Japan Weekly Mail*, 一九〇三・九・二三付)「横浜開港資料館蔵」の「乗客欄」(Passengers)に「永井壮声」の名前がみられる。その記事を和訳すると――

日本の汽船「信濃丸」で、ブリティッシュコロンビアのヴィクトリア経由でワシントン州のシアトルへむかう客は以下の通り。

一等客室は――M・ムア夫人、イマムラ氏、Y・ヤマシタ夫妻、T・オカハラ氏、W・C・ケイム氏、U・オーツカ夫妻(子どもと女中を同伴)、Y・M・ロバート氏、P・ランサム夫人、K・カメダ夫人、A・E・コリングス氏、T・B・カドリイ氏、F・Pフェル氏、A・M・ナップ氏、レイウス夫妻。

二等客室は――ロバート・スコット氏、T・カンド氏、W・カンド嬢、C・ハラ夫妻、J・アシカガ氏、S・ヤマモイオ氏、S・キムラ氏、T・タムラ氏、K・オーハシ氏、S・カワグチ氏、H・マツエ氏、Y・オキタ氏、Y・ホシノ氏、M・アキヤマ氏、S・ナガイ氏。

三等客室――二八五名。

末延氏の『永井荷風の見たあめりか』には、「荷風が、文学志望の学生くずれの分際でありながら、分不相応に、当時の日本で一番豪華な一等船室に乗れたのは、日本郵船横浜支店長を務めていた父、久一郎の力に与かる所が大きかった」(二七頁)とあるが、先の記事通りであったとすると、荷風は一等船客でない、二等船客であったことになる。

いずれにせよ、父久一郎は、将来日本の商業界で立身の道を開いてやろうとの親心から、学費を惜しまず、荷風を遊学の途につかせたのである。

〔西遊日記抄〕、明治39・7・10付)。荷風はアメリカからよく巖谷小波のもとに原稿を送ったが、それは木曜会の席上で朗読され、皆の批判をうけたのち、小波の手で『文藝倶楽部』や『新小説』へ送って掲載された。<sup>(7)</sup>

荷風は船上の人になるや、故国の山影に別れをつけ、一路シアトルをめざした。船客はアメリカ大陸に達するその日まで、半月ほどの間、ほとんど堪えがたいほどの無聊に苦しめられる。一つの島、一つの山を見ることなく、目に入るものは茫漠たる海原だけである。船は大きな波浪が起伏する中をアメリカをさして進んだ。空も北へ進むにつれて灰色に変じ、いまにも雨か霧になりそうな気配がした。

荷風は、そうした淋しい海のうへの、さみしい旅人であった。

明治三十六年(一九〇三)十月五日の夜——信濃丸はカナダのヴィクトリア港に到着した。異郷の山影は、黒い怪物が横たわっているように見えた。荷風は「嗚呼余の身は遂に太平洋の彼岸(むこう岸——引用者)に到着せるなり」(『西遊日記抄』)と、感慨無量の気持ちを日記にしている。

十月七日、シアトル港に到着。当地において、父の知人の古屋商店のタコマ支店の支配人・山本一郎に案内されタコマへむかった。

タコマ(Tacoma)は、ワシントン州西部の港町。当時の人口は約三万八〇〇〇人。北パシフィック鉄道の終着駅がある。街はコメンズメント湾を臨む高台<sup>アラス</sup>にあり、そこに大きな製材所、鋳物工場、製錬所、鉄道の作業所、醸造所、製粉所などや穀物などを積み出しの産業施設があった。

この街は木材、茶・砂糖・絹・ゴムなどを輸入した。

街の主な建物は、裁判所・市役所・オペラハウス・商工会議所・カーネギー図書館・聖レオカトリック教会・北パシフィック鉄道会社・アニー・ライト神学校などである(Karl Baedeker: *The United States with an excursion into Mexico*, 1904, P.477)。

タマコはシアトルと同じように空気ばかりか景色もよく、田園的詩趣を味うのに格好の土地であった。海に出て釣りをすると、大きな黒鯛がつかれたし、山の手の落葉樹の中を踏みわけてゆくと、大きなマツタケ<sup>(8)</sup>がとれた。荷風は南タコマ街七二五番地山本一郎方に旅装をといいた。山本宅は木造二階建であり、荷風の二階の一室をあたらされたが、そこは眺望のよいところであった。毎日、語学のけいこをする以外にしがたないので、十月二十日に「タコマ・スティディアム高等学校」に入学し、フランス語の初歩を修めた。<sup>(9)</sup>荷風のフランス語学習の進捗ぐあいであるが、日本を出アメリカにむかったころ、やっとフランス文法の一通りを終えたばかりであった。アメリカに上陸しても英語を学ぶ気はなく、すぐフランス語の教師についた(「モーパッサンの石像を拝す」)。しかし、タコマの高校に入学したけれど学校は欠席しがちであった。



1894年（明治27年）製作のタコマ市の地図。〔筆者蔵〕

荷風はタコマに一年ほどいたのであるが、その間毎日のように古屋商店のタコマ支店（ブロードウェー街一三五番地、レンガ建の三階ビル）にやって来ると、奥のカウンターに入り、日本から輸入した書籍や雑誌などをよむのを常としていた。<sup>(10)</sup> ときにかればブロードウェー街から二つさがったパシフィック通りへ出ると、繁華街をほったつき歩いたり、公園を散歩したりして、つれづれを慰めた。

公園に入ると車馬の声は遠く、草は青々としていたが、木々の梢はな<sup>こ</sup>な<sup>すえ</sup>かば黄葉していた。

翌明治三十七年（一九〇四）一月——薄倅詩人エドガー・A・ポーの詩をよむ。四月になると、自転車にのり郊外を散策し、広い<sup>まきば</sup>牧場や林間の湖水をみて夢幻の境にルイス（アメリカ中西部——ミズーリ州東部の河港の町）におもむき、万国博覧会を見学。

\*

一 森の中の小さい町カラマズー。

十一月——人の勧めによりミシガン州のカラマズー（アメリカ中北部——ミシガン州南部の町）の学校に入る決心をした。そのころ、この町に行くには、シカゴから汽車で四時間ほどかかった。カラマズー（Kalamazoo）の当時の人口は、約二万四〇〇〇人。<sup>(11)</sup> デトロイトの西約二〇〇キロに位置し、カラマズー川中流沿岸にある。その当時は農業中心の町であったが、いまは自動車部品工業が盛んなようだ。

荷風は当初、ミシシッピー河を南にくんだり、フランス人の移民が多く住むルイジアナ州の大学に入るつもりであったが、かの地の風土は健康に  
よくない、と人がいうために、やむなく北へ向ったという（「西遊日誌抄」）。

十一月二十二日、森の中の小さい町カラマズーに到着。<sup>(12)</sup>当地は寒気きびしく、夜は骨が凍るかと思えるほど寒かった。同月二十八日、荷風は当地  
地バプティスト派の「カラマズーカレッジ」（創立は一八三三年、当時、学生数は一七五名<sup>(13)</sup>）の聴講生として受け入れられ、のちにフランス語を  
三単位取得した。そのころ、このカレッジに学ぶ日本人といえば永井のほか、キリスト教の神学者が一人いるだけであった。  
カラマズー・カレッジに、荷風の成績表が残されている。荷風の学生記録は、つぎのようになっている。

KALAMAZOO COLLEGE

Student's Record.

Name *Sobecki, Nagai*  
 P. O. Address *Tokyo Japan*  
 Parent or Guardian *S. Nagai*  
 Birth *Tokyo, Japan, Dec. 3, 1879*  
 Enrollment *Nov. 28, 1904*  
 Course (一字あるが判読できない)  
 Graduation

本紙の末尾に「これは正式の成績証明書トランスクリプトではない」とあるが、秋・冬・春の学期を通じて平均八〇点とっている。これはけっして悪い成績では  
ない。いまならさしあたり「優」といったところである。



荷風はこれまで暁星の夜学、タコマの高等学校、カラマズーのカレッジ、のちにニューヨークの夜学でもフランス語を学んでいるが、その主目的は憧憬の地フランスへ渡航するための準備にはかならなかった。

カラマズーは、じつに淋しい所であった。タコマでは軽べつ的に「*Jap*」(日本人<sup>(15)</sup>)とよく呼ばれたが、ここではそのようなことはなかった。荷風の考えでは、当地で冬ごもりし、来年の四月か五月になったら、シカゴかニューヨークに移動するつもりであった。

十二月に入ると、カラマズーの寒気はさらにきびしくなり、氷点下の日も珍しくなかった。が、日数がたつにつれて寒さにも馴れ、寒冷の地カラマズーも佳景(かげ)に富んでいることを知った。とくに雪に埋もれて街路を行くそりのすがすがしい鈴の音を聞くと、あたかも自分がロシアの小説中の人物のような気がした。

やがて年が明けて明治三十八年(一九〇五)。

一月、父・久一郎が郵船会社の用務をおびてシアトルにやって来たが、息子に会うようなく帰航した。

三月になると、カラマズーもだいぶ暖くなった。夜、勉強をおえて図書館から帰るとき、日本の春雨(はるきめ)のようなものが降りだした。また枯木のかげなる人家の灯りや、そこから漏れ聞えるピアノの音などを聞くと、そぞろに一家だんらんの光景を想像し、客愁(旅のうれい)禁じがたいものがあった。

四月、カレッジの丘に駒鳥がやってきて、春の到来をつげた。丘をくだり、青草の茂る牧場に出、小川のそばに佇んだ。晴れ着をきた村の娘が、若い男と腕組みしながらやってきた。五月、この地の財産家のパーティに呼ばれ、夜おそく下宿(カラマズー、エール街一二一番地)に帰った。

また某日、町の丘陵にのぼり、初夏の太陽に照らされた谷間や高原、樹林や人家、病院、果樹園などをながめ時の移るのを忘れた。

六月十五日——カレッジのフランス語の講座は終了した。学校はこの日をもって暑中休暇となった。翌十六日、渡米の折船中で知りあいになった今村次七をキングストン(ニューヨーク州東南部ハドソン川中流右岸にある町)に訪ねるため、夜行でカラマズーを去った。カラマズーに客愁を託すこと八ヵ月であった。

同月三十日、正午の汽車でキングストンを去り、同日の夕方五時ごろニューヨークに到着した。ニューヨークでは、ブルックリンのコンコード街一七番地を旅宿とした。

七月八日、いとこの永井松三(まつぞう)一八七七〜一九五七、大正・昭和期の外交官、駐独大使のち外務次官)と会い、よもやまの話をした。その折、

アメリカの生活が詩情を喜ばせる点に欠けているので、フランスに渡り、かの国の文学を研究したいといい、その是非を問うたら、賛成してくれた。まずその旅費を工面するために、暑中休暇をアルバイトに当てるといういわれた。そこで荷風は直ちに『ニューヨーク・ヘラルド』紙に、求職広告をのせた。

JAPANESE general houseworker wants position in small family. Nagai 17 Concord, Brooklyn<sup>(16)</sup>

日本人の家事労働者、小じんまりとした家庭におけるしごとを捜しています。連絡先は、ブルックリンのコンコード街一七番地に住むナガイ。

この求職広告にたいして、引き合いがあったかどうか不明である。

\*

一 ワシントン暮色——娼婦イデイス。

しかし、十日ほどすると、ワシントンの日本公使館で身もとの正しい小使いを募集していることを耳にはさんだので、いとこの永井松三にその周旋を依頼した。日本公使館で小使いが必要になったのは、日露講和談判がはじまり、しぜん公使館の事務しごとが増えたためである。

幸い荷風は採用になり、七月十九日ニューヨークよりワシントンに赴き、二十日より勤務をはじめた。荷風の住居となったところは、日本公使館の三階の一室である。仕事は毎朝館員が出勤するまえに、事務所をそうじし、郵便物を調べ、電話の取次ぎ、新聞を取りそろえることであった。夜は本をよむ時間が充分あった。

ともあれ、臨時雇いであるから、日露談判がおわるまで働き、公使館の俸給と日本からの送金とを合わせ、秋風が吹くころ大西洋を渡ってフランスへおもむく計画であった。

八月のワシントンは相当にあつい。ワシントン市街はカエデが植えてあり、十字路には必ず花壇があった。荷風は夕暮れ、そのベンチにすわると、街燈の光に照らされながら、モーパッサンの『水の上』を原書で読みはじめた。



1905（明治38年）当時のアメリカ女性。  
『ザ・ニューヨーク・ヘラルド』紙  
（1905・7・8付）より。

荷風によると、アメリカに来て二年ほどたっても、かれらの会話を聞きとることはできなかったという。しかし、モーパッサンの作品のうち、ごく読みやすいものは辞引をたよりに、どうにかわかるようになっていた（「モーパッサンの石像を拝す」）。

八月二十九日、フランス行には不賛成である、との父・久一郎からの家信に接した。挫折と失望とに馴れっこになっていた荷風は、別におどろかなかったし、なげきもなかった。

かれはどんなことをしてもフランスへ渡り、モーパッサンが描いた世の中をわが目でみたいと思った。この望みをとげることができないうちは、たとえ親が急病であっても日本へ帰るまい、との固い決意でいた。ただこの一念を貫くため、公使館の腰弁（安月給取り）の生活を甘んじて受け入れることができた。

九月——公使館の事務室のあとかたづけをすませ、地下室へおりて、台所で黒人の召使いと夕食をすませたのちも、日はまだ高かった。陽気が涼しくなったので、一日電車に乗って郊外へ出かけ、広野や木立を賞したが、その風景はミズリー州のものに似ていた。

九月十三日——、朝夕の風が身にしみるようになった。街の燈火に誘われて公使館を出ると、下町の演芸場に出かけ、そこで俗曲などを聞いて旅愁をなぐさめた。やがて演芸場を出てから、とある酒場に入り、カクテルを飲んでると未知らぬ女が声をかけた。名はイデイス・ジラードという。たちまち意気投合し、ポトマック川畔の公園内をいっしょに散歩した。女はわたしの家に来ないかという。程なく女に誘われるままその家に至った。

その後、なじんだ女との淫事に耽るようになり、女のもとに赴くには、そこでシャンペンを傾け、淫楽のなかに身を沈めた。

七月より黄葉の十月まで、四ヵ月ほどワシントンでくらししたが、九月五日日露が講和条約をむすんだので、公使館内の事務しごともようやくひまになり、十月いっぱい解雇になると申し渡された。

某日、夕食をすませたのち、いつもの酒場に行ってみると、脂粉をこらし、華美な帽子をかぶったイデイスが、二、三名の女友だちとテーブルを前にすわっていた。彼女を誘い出すと、公園の中に入



り、人のいない小道を落葉をふみつつ歩いた。そのとき化粧の香りがプーンと鼻孔の中に伝わってきた。こんどワシントンをあとにニューヨークへ帰る、というと、イデイスはしばらく無言でいたが、腹立たしげに、靴の先で散りつもった落葉を音高くけった。そしてにわかには荷風の体を堅く抱くと、声をくもらせて、今宵からわたしの家へ来てほしい。執念深く跡を追わないから、別れの日まで一日一回はかならず会いに来てほしい、という、ひたとその顔をかれの胸に押しあてた。

十一月一日——ワシントンをいよいよ明日去ることになったイデイスの家で別離の杯をくんだ。翌日、汽車にのりニューヨークに帰り、イーストサイド（ニューヨーク市マンハッタン島の東部地区）にある日本人経営の安ホテルに宿泊した。そのホテルに泊ったのは多くの日本人苦学生がおり、仕事をさがすのに便利であろう、との考えから出たことであつた。

しかし、思わしい勤め口がないので、再び学校生活をつづけようと思ひ、ふたたびカラマズーにむけて出発。墓地にちかい一農家の二階（ウッドワード通り一四番地）を借りた。

三十日。横浜正金銀行（明治十三年「一八八〇」設立、昭和二十一年「一九四六」閉鎖）ニューヨーク支店長から突然電報が舞い込み、来談すべしという。直ちに三日以内にカラマズーを引払い、馳せつける旨返電した。ニューヨークにおもむき銀行員となることを返電したけれど、都会に出ると文芸の道から遠ざかざるを得ないことを憂いた。

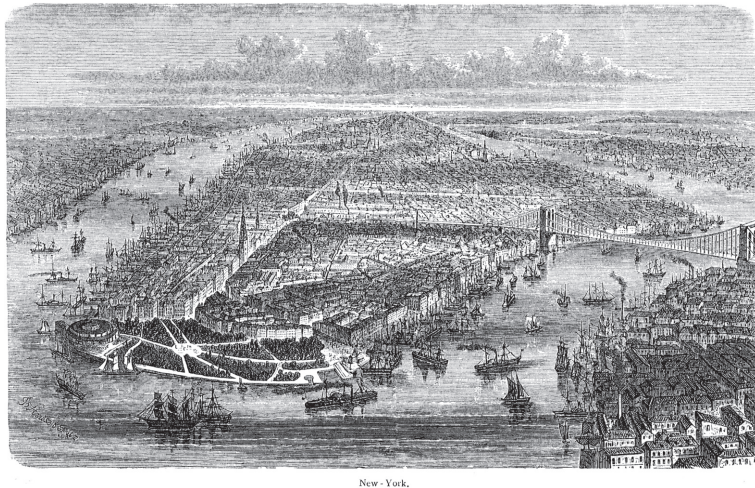
十二月七日——父の配慮により、父が望める横浜正金銀行ニューヨーク支店（ウォール街六三番地）に入った。住居は部屋がみつかるまで、いとこの永井松三のアパート（ウェスト一一五街六〇五番地）にやっかいになることにした。昼間は空気のようにどんだ銀行の事務室に閉じこめられる生活だが、しごとがおわれれば夜は自由である。

オペラを観たり、酒場に入ったり、移民街や公園を散策するための自由な時間がある。

二十五日、午後セントラル公園の樹蔭を歩み、夜になってイーストサイドのイタリア人街の教会に入り、旧教の礼拝式を見物したのち、夜がふけるまで、チャイナタウンの酒場でクリスマスをしたのしんだ。

明治三十九年（一九〇六）の元旦を、市中の汽笛のひびきとともに迎えた。年頭の四、五日は、オペラを観たり、酒場に入って音楽などを聞いた。たりした。

一月七日——フランス婦人（年は、六十ばかり、名はド・トゥール）の一間を借りることにし、そこに行李を移した。新しい下宿はウェスト八



New-York.

1880年（明治13年）当時のニューヨークを描いた銅版画。〔筆者蔵〕

十九丁目にあった。フランス人のアパートに移ったのは、モーパッサンをはじめとするフランスの文学者の“俗語”を理解するためであった。それにはフランス人の生活に近づき、その中に入ってゆかねばならない。フランス婦人のアパートに下宿してよかったのは、朝夕フランス語が聞けたことと、仏語会話の練習するまたとない機会を得たことであった。

八日、朝から小雪が降った。勤めの帰り、プッチーニの歌劇「トスカ」をイタリア語で聴いた。

一月九日——帰宅してみると、机の上に一通の封書が置いてあった。差し出し人は、ワシントンで別れたイデイスである。一別以来、ときどき文通していたが、来週ニューヨークにやって来る、とあった。

ニューヨークに来て以来、夕食は移民の街の酒場やチャイナタウンのレストランですませた。食事のとき飲む酒に陶然と酔うことしばしばであった。市中は数日来、雪景色である。それはなかなかうるわしい光景であった。

一月から二月にかけて、ルウ・ドゥミックの『仏国文学史』、ピエール・ロチャゾラの作品を、またツルゲーネフの『獵人日記』をフランス語訳でよんだ（おもいで「亜米利加の思出」）。

二月になるとイデイスからたびたび手紙がくるようになった。それを読みよるごとと同時に恐怖を覚えた。二月から三月にかけて、オペラへよく出かけた。残雪が消えず、風もつめたかった。ときにひとりハドソン河畔やブルックリン橋下の波止場あたりを散策し、帆前船の甲板でおこなわれる熱帯の果物の競売などをながめた。

ウエスト二十二丁目あたりの裏通りは、フランスの移民街である。そこにはフランス人が経営する酒場があり、娼婦が多く姿をみせる。玉代は三ドルから五ドルである。その街にはまたフランスの貸本屋があって、ドーデやモーパッサンの小説などをそなえていた。

四月八日、渡米の折、信濃丸の中で知りあいになった今村次七（二等船客）は、家からの送金によって働かず暮らしていたが、こんどある女学校の小使いとして住み込み、ヨーロッパ旅行をするために給金を貯えていた。久闊を叙していた同人とこの日再会した。

六月になると、ニューヨークは早や夏である。セントラル公園の樹木の葉は、いよいよ新緑をまし、青々としている。同月のある土曜日、公園の樹木のふもとにすわり、モーパッサンの『詩集』をよんで半日すごした。また『女の一生』<sup>(17)</sup>もこのころ読んだ。すでに銀行勤務が厭いとわしくなっていた。勤務がおわってからの同僚とのつきあいか、日曜日ごとに支店長の社宅にごきげん伺いをせねばならぬことにへき易やすした。

そのような苦痛を忍んだあとは、きまってチャイナタウンの魔窟におもむき、そこでごろつき共と酒杯を傾け、酔っぱらうと娼婦の腕を枕にして眠った。彼女らはいまは苦界にあるが、もとは人の子である。母も恋人もあつたはずである。泥酔して狂ったように悪態をつくさまを見てると、思わず深き涙をもよおした。極限まで墮落した人間と希望を失った孤客のじぶんとを重ねあわせ、同病相あわれむの感をいっそうふかめた。

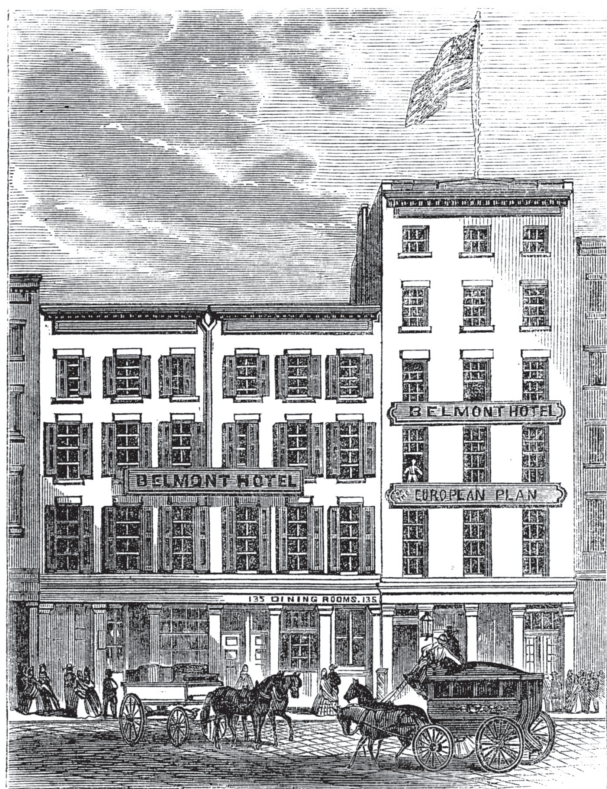
六月二十二日、モーパッサンの『テリエ館』をよんだ。二十七日——フランス語の夜学校に通いはじめた。七月二日、いまはトレントン（フィラデルフィアの北東約四〇キロ、デラウェア川下流左岸に位置）にいるイデイスから手紙が来、ニューヨークに来るといふ。

八日、イデイスはすでにニューヨークにある。四十五丁目の「ベルモント・ホテル」で待つ、といった電報が届いた。昨年こぞの十一月、木の葉が落ちたワシントンの街頭で別離の涙をながしてから九ヵ月たっていた。共にホテルですぐすこと半日。夜になるのを待ってセントラル公園を散策し、その後コランバス広場サウスクにある酒場に入りシャンペンを傾けた。やがて酒に酔い、店を出ると、腕をくんで千鳥足で澄火の街を歩き、夜が明けるところホテルに帰った。

イデイスが語るには、ことしの秋か冬にはニューヨークに移り、静かな裏通りに小ぎれいな貸間フラットを借りて、いっしょに暮したいという。それを聞いてわが身はフランスの小説に出てきそうな間夫まぶ（情夫）かつばめジゴロのような気がしたが、まんざら悪い気はしなかった。しかし、いずれ渡仏ということになると、別れねばならぬから、再度の愛別離苦のことをおもうとよく眠れなかった。

七月十六日、モーパッサンの『ペラミ』をよみはじめた。十九日の夜、フランス語の夜学にいくとき、マジソンの四辻を過ぎようとした。そのとき街上の看板をみて、パリのそれを連想した。二十六日、フローベルの『エデュカスイヨン・サンティマンタル』をよんだ。

二十八日（土曜日）、「ベルモント・ホテル」<sup>(18)</sup>のボーイがイデイスの手紙をもって来た。直ちにホテルにおもむき、夕食後ブロードウェー（市の南北に走る大通り。劇場や歓楽街が多い）を散策し、そここの酒場に入って酒をのんだ。帰途、ぜひ寓居をみたいというので案内してやった。夜が明けるところ、共にホテルにもどった。翌二十九日（日曜日）、お昼ごろ目がさめた。雨がふっていた。イデイスと共に窓ぎわのソファーにすわって話をした。夕飯のとき白ブドウ酒を傾けたが、そのとき彼女はじぶんの不幸な過去をかたり、涙を流した。八月十一日、いとこの永井松三



1860年代の「ベルモント・ホテル」の図。(筆者蔵)

の新しいアパート（セントラル公園一〇六）に引っ越した。

十四日、帰宅すると机の上にイデイスからの電報が置いてあった。今夜ニューヨークへ行くので待っていて欲しい、と電文にあった。髪を直し、衣服を換えていたとき。「ベルモント・ホテル」のボーイがイデイスの手紙をもってきた。

彼女はいった。トレントンの町にも住みあきたので、あなたがいるニューヨークに引っ越したい。貯金も三〇〇ドルあるので、しばらくこのホテルで暮らし、その間に貸間をさがすつもりだと。

二十日、イデイスはホテルを引き払い、四十九丁目の貸間に移った。かせぎに行く所は、演芸場やダンスホールである。そこで客をひろって、日々のかてを得るつもりだといっていた。

二十三日、朝銀行におもむくとき、乗った列車の中で、モーパッサンの作品をよんだ。

九月中旬より下旬まで病い（腸チフスの疑い）のため欠勤した。チフスはチフス菌によって起る伝染病。高熱、発疹などの症状が出る。

九月十七日、病床の中でモーパッサンの『イヴェット』をよむ。十九日、イデイスより大きな紅いバラの花束と手紙が届いた。

十月三日、病床を出て、はじめて外出した。五番街のブレンタノ書店（一八五三年、オーギュスト・ブレンタノによって創設）の前を通ったので、店の中に入り、モーパッサンの『ロンドリ姉妹』を求め、それよりイデイスのアパートを訪れ、晩さんを共にした。五日より再び銀行に出勤した。

十四日、午後、以前に間借りしたフランス婦人のド・トゥール宅（ウエスト八十九丁目）を訪れ、フランス語会話の練習をした。のちイデイスを訪ね、酒場でシャンパンを抜き、晩さんを食した。十六日、銀行の帰途、株式取引所に近い横町にある小さなフランス料理店で、ブドウ酒を傾けながら夕食をとるようになった。

そして食後、ほろ酔い気分で給仕ガールズにパリの新聞をもって来させ、それに目を通した。十一月よりオペラをひんばんに観た。

十二月十六日(日曜日)、夕方ブロードウェイの酒場に入り、イデイスを待った。程なく彼女は盛装してやってきた。いつものようにシャンペーンに酔い、黒人が歌う唄をきいた。

三十一日、ひとりブロードウェイの酒場に入り、ブドウ酒のみながら、ラマルチーヌの詩集をよんだ。

明治四十一年(一九〇七)元旦。お昼ごろ起きると、茫然と灰色の空をながめた。一月七日、ミュッセの詩をはじめ読んで感銘をうけた。年頭からしばしばオペラを観たり、音楽の演奏を聴いた。

十三日(日曜日)、イデイスの部屋を訪れた。隣室にパリから来たというジョゼフィンという女がいて、同夜三人で晩さんを取り、パリの話を聞き感興をそそられた。

十七日、以前に間借りしたフランス婦人ド・トゥール宅に移った。ふたたび朝夕、フランス語を聞くことになった。二十日、マラルメの詩「牧羊の午後」をよみ感動した。

六月——スターテン島(ニューヨーク湾内)に暑さを避けたが、そこでロザリンというイギリス娘と知り合い、毎夜、森や海辺を散策した。

七月二日——いずれ銀行を免職になると思っていたら、この日横浜正金銀行リヨン支店に転勤の命をうけた。ほとんど父のはからいによるもの「感激極まりて殆ど言ふ処を知らず」(西遊日誌抄)。三日、大西洋汽船会社(Compagnie générale transatlantique 略して Transat)の出張所(総代理店はブロードウェイの三十二番地)へおもむき、十八日出帆の「ブルターニュ」号(La Bretagne)の中等切符を購入した。『ニューヨーク・ヘラルド』紙の「船舶ニュース」(一九〇五・七・九付)によると、ブルターニュ号は、月一回、木曜日の午前十時にニューヨークを出帆し、ルアーブル港(セーヌ河口)にむかう。

九日、イデイスと別杯をくんだ。彼女と別れるに当り、ひじょうにやかいだと思ったが、泣きながら何もいわずに出発させてくれた。男がフランス好きであることをよく知っていたし、将来を思っで行かせてくれた。とくにぐちをこぼすことはなかったが、パリには同じ商売をやっている女友だちが二、三人いるので、何とか旅費を工面して、冬になるまえにパリにおもむき、それよりリヨンに下って、そこで再会しましょう、といった。イデイスが涙ながらに語る繰りごとを聞いても、荷風は上の空であった。

十七日、トランクを船に送り、下宿を引き払い、波止場にちかい十四丁目のあるホテルに投宿した。



七月十八日——午前十時ごろ、大西洋汽船会社のブルターニュ号に乗って四十二番埠頭を出帆した。

一 憧憬の地フランスへ。

およそ十日後の同月二十七日、夜十時半ごろルーブルに入港した。船中で一泊し翌二十八日の午後八時ごろ、特別列車にのりパリにむかった。ノルマンディーの黄金色の野をセーヌ河に沿って走り、ルアンを経てお昼ごろパリのサン・ラザール駅に到着した。駅前広場を通り抜け、とある街角の小ホテルをみつけ、その三階に旅装をといた。

\*

荷を部屋に置くと、直ちに旅行案内書を手にし、馬車を走らせ、モンソー公園 (parc de Monceau) にむかった。恋い焦がれていた、モーパッサンの石像を拝するためであった。

パリに滞在すること二日、この間馬車をやとって市内の目ぼしい建物を見物した。二日目の夕暮、リヨンにむけて出発するため、カフェで夕食をおえると宿にもどり、一切の勘定すませた。宿のマダムは帳場の長椅子に招くと、すわるようにいい、旅について細かい注意をいろいろあたえてくれた。そして馬車が来てそれに乗ろうとしたとき、暖炉の上の花びんから白バラを一輪



パリの「モンソー公園」にあるモーパッサンの胸像。〔筆者撮影〕

抜きとって、旅のなぐさみにと渡してくれた。荷風は訳もなく、ひじょうに感動した。

二十九日の夜、七時二〇分、リヨン駅よりマルセーユ行の急行に乗った。汽車は市を出ると、夕日に照らされた広漠たる麦畑を走った。やがて日が暮れ、月が出ると、月光が野原を照らしていた。夜十二時、駅員の「ディジョン……」「ディジョン」と土地の名を呼ぶ声が聞こえた。そしてさらに三時間半ほど経過したころ、リヨンの駅舎（「ペラッシュ駅」）に着いた。

\*

一 霧の町リヨン<sup>(19)</sup>

汽車をおりたとき、駅の時計の針は午前三時半を指していた。リヨンはフランス中東部——ローヌ県の県都である。すっかり寝静まっている街の中を馬車を走らせ、ソーヌ河岸のとあるホテルに入って、旅装をといた。一晩泊ったのち、八月一日横浜正金銀行の支店に出頭すると、着任の報告をなし、旅費の明細表を提出した。

ニューヨークからパリまで要した費用（船賃、汽車賃をふくむ）は、米貨で四十九ドル。パリからリヨンまでの汽車賃は、約三十八フランであった。

二日、ローヌ川西岸ヴァンドーム街の下宿屋——ランブル・セック街十九番地に移った。

やがて昼間は、不慣れた銀行のしごとや俗人とのつきあいが再開した。夕方、銀行を出るときは生気はつらつとし、カフェやオペラ座に出かけ音楽を聞いたりした。読書としては、ユイスマンスやアンリ・ドゥ・レニエの作品を愛読した。モーパッサンの作品は、すでに再読三読してしまっていた。



リヨンにおける荷風関係地。加太宏邦著『荷風のリヨン』（白水社、平成17・2）を参照。



19世紀のリヨンを描いた銅版画。〔筆者蔵〕

十一月になると、フランスの秋を知るためにマルセイユへ小旅行を試みた。明治四十一年（一九〇八）の元旦をリヨンで迎えた。一月二日、ユイスマンスの「彼方<sup>ラバ</sup>」をよんだ。霧が立ちこめている河岸の風景はすばらしい。暖炉のそばでユイスマンスの小説をよんだ。一月にニューヨークにいるイディスに二度ばかり手紙を出したが、返事はなかった。二月一日、銀行をやめる決心をし、その旨父に手紙で知らせ、三日には支店長の私宅を訪れ、辞意を表明した。十四日、ルソーの抜粋集を購入



した。

三月五日、銀行より解雇の命をうけた。この日ニューヨークのイデイスより手紙が来た。二十日、父からの来書により、帰国することになったが、フランスを去さねばならぬ気持はしなかった。多少たくわえもあるため、ニューヨークへ帰ってイデイスとの乱れた放らつな生活をする事も考えたが、その決心がつかなかった。

荷風のアメリカ時代の愛人イデイスには後日談がある。彼女はなかなか実直な女性であつたらしい。玉代を取つたのは、はじめの二、三回であり、その後は金を取らなかつたという。その家に行けば食事をつくって待っているし、手紙をきちんと寄こすし、私欲を離れた、まごころのある女性であつた。荷風と別れたのち、別の日本人と親しくなつた。荷風はその男性からイデイスのことをいろいろ聞いた。

実業家（鉄工所重役）・相磯凌霜（一八九三〜一九八三、晩年の荷風と親交をかさねた）との対談において、荷風はつぎのような話をしている。

相磯 先生はひとりのひとに長く関係していませんね。日記を見てみると……。アメリカ時代のイデイスは、いちばん先生のお気に入りのおひとりでしょか。

永井 西洋ですもの。こっちみたいに、すぐ代りがないから。それにあの女は、金というのをとらないのだから。そういう点でいえば、米国のほうが偉いですよ。金の国っていったって……。はじめの二、三度はやはり金を出したんですよ。ニューヨークに移ってから、ワシントンからね、それからなんか金なんかとりはしないもの。ぼくがいけば飯を作って、ちゃんと持ってくるんですよ、だからただいけばいいんです。そういうのは日本の下宿にもひとりもなかつた。それにあの女はうそはつかなかつた。毎日手紙をよこすのだって、向うからよこす時間と、こっちは来る時間を考えている。

朝、銀行へ行く前に、ちゃんと郵便箱の中にはいつているもの。そういう点、西洋の女は忠実というか、規則正しんです。

相磯 ほんとうに先生のことを思っていたわけですね。しかもイデイスさんというのは商売人でしょう。それで先生にお金を使わせないということは……。

永井 日本の女から考えて、金を使わせないようにばかりしているから、ぼくは脈があるな、と思った。

相磯 あの人は、先生をフランスまで追っかけていきそうでしたが、いかなかったですね。

永井 そのあいだに、また別の日本人とできちゃったから……。帰ってきてよほどたつたから、その人に会って聞いたのです。  
相磯 だいたい日本人がすきなんだな、イデイスさんは。

永井 どういうわけですか、ぼくの時分には知らないわけですよ。ワシントンでただいきなり買ってしまった女だもの。それからだんだんタダになつてきて、向うから、なんでも出すようになってきたんですよ。

相磯 先生がフランスへ行って、日本へ帰ってから消息はないのでしょうか。

永井 消息はありません。それからずっと後に、その女を買った日本人と、日本で会って話を聞いたんですよ。その人は「彼女はブラジルかどこかへいきたいといっていたから、今ごろ生きてるかどうかわからない」といっていましたよ。

やはり南のメキシコやどこかのニューオルリアンズに近いところに生れた女だから……。それからこちで勤めているうちに、ほかの男ができて墮落してそういうようになっちゃったんだから……。

相磯 先生の書いたものを見ると、フランスまで来るわけだったんでしょ？

永井 うん、日本へも西洋の女はくっついて来るからね。フランスなんかわけないから来やしないかと思っていたが、いいあんばいに来ませんでしたよ。来ないようにいろいろ話はおいたのだからね。……（笑）

注・永井荷風著『荷風思出草』（毎日新聞社、昭和30・7）より。

二十六日、名残りにと、リヨンの街々を散歩し、ソーヌ川のはつりを歩き、橋の手すりにもたれ川の水を見てると涙が流れてきた。

三月二十八日——この日、意を決してリヨンを出発し、パリにむかった。ディジョンを過ぎたころ日が暮れ、夜十二時ごろパリに到着した。リヨン駅の近くのホテルに投宿した。翌二十九日（日曜日）終日パリ市内を歩き、三十日、ル・パンテオン・ド・パリ（偉人らを合祀する霊廟）のそばにある「オテル・スフロ」(Hotel Soufflot—9 Rue Toulrier トゥーリエ街九番地——現在はアパルトマンになっている)<sup>(20)</sup>に移った。当時、日本人はこのホテルを利用したようである。

午後は再びモンソー公園を訪れ、モッパッサンの像をみた。以後、ルクサンブルク美術館、ルーブル美術館、オデオン座、コンセル・ルージュ、ペールラシェーズ墓地、モンパルナス墓地、カジノモンマルトルなどを訪れた。パリ見物でいちばん興味があったのは墓地の散歩であり、とくにモーパッサンが眠る墓を参詣し、積年の宿望を果たすことができた。またパリ滞在二ヵ月ほどの間に、オペラや芝居をほとんど観つくしたが、この間に学友の瀧村立太郎（外国語学校の仏語科出身）や松本丞治（中学校の先輩）に案内されて、クリュニイ博物館の前にあるホテルに滞在していた上田敏（一八七四—一九一六、明治期の外国文学者・評論家、当時東大講師）を訪れた。上田はそのころ私費をもって海外旅行中であった。



パリの「モンパルナス墓地」にあるモーパッサンの墓。〔筆者撮影〕

著述を通じて、ヨーロッパの文物や景色にあこがれるきっかけを与えてくれたのは上田敏であった。

五月二十八日——午前十時すぎ、サン・ラザール駅を急行列車で発し、セーヌ川沿いを走ってルアン（フランス中北部、パリの北西一三七キロ）に至り、そこからノルマンデーの沃野を通過してディエップ（フランス北西部、パリの北西一八〇キロ、イギリス海峡にのぞむ港町）に着いたのは、午後の二時ごろ。それからすぐ汽船に乗り、二時間ほどかかって対岸のイギリスに渡り、再び汽車にのってロンドンにむかい、その日の夕暮英都に着いた。そして辻馬車の御者に案内されヴィクトリア駅ちかくのホテルに入った。

三十日（土曜日）午後十二時、讃岐丸<sup>さぬき</sup>で出帆、帰国の途についた。七月十五日、同船は一ヵ月半の船旅をおえて神戸に到着。弟威三郎の出迎えを受け、汽車で帰京した。汽車から久々に見る故国日本の景色は、人家の屋根といい松、雑木林といい、みな黒いものであった。家の中に入っても、視覚を刺激する色彩がないことであった。

\*

#### 一 明治期のモーパッサン紹介。

いったい荷風はいつごろモーパッサンという作家を知り、どのような作品をよみ、どのように受容したのか。これらの点について述べてみたい。荷風は「モオパッサン序」（伝記『モオパッサン』後藤末雄との合著、実業之日本社刊、大正四年「一九一五」六月）のなかで、フランスの自然派の小説家モーパッサンの著作がはじめて日本の文壇に翻訳されて、すでに二十年ちかい——記憶に誤りがなければ、最初の翻訳家は上田敏氏



晩年のモーパッサン

ではなかった、かと記している。

大正四年（一九一五）の二十年前といえ、明治二十八年（一八九五）のことである。この年、まだだれもモーパッサンの作品を訳していない。最初のモーパッサンの翻訳は、大西忠雄の「明治期モーパッサン輸入資料（その一）」（『日本比較文学学会会報』昭和62・6、名著普及会）によると、明治三十一年（一八九八）二月田山花袋が訳した「二兵卒」（未発表反訳、のち活字となる）である。これは原題 *Petit soldat* [1885] の英訳 *Little Soldier* を重訳したものである。

第二番目の翻訳は、同年三月に国木田独歩によって訳された「糸屑」（『国民之友』に掲載、原題は *La ficelle*, 英訳 *The piece of string*）である。第三番目は明治三十一年（一八九八）八月に田山花袋が訳した「コルシカ島」（『読売新聞』に掲載、原題は *Le bonheur*, 英訳 *Happiness*）である。これらはいずれも英訳からの重訳であった。が、第四番目には明治三十五年（一九〇二）五月に発表になった上田敏訳「文反古」（『帝国文学』に掲載、原題は *Le Lit*）がくる。これはフランス語から訳したモーパッサンのものとしては本邦初訳であった。したがって荷風の思い違いであろう。大西忠雄の「明治期モーパッサン輸入資料（一）」（十一）は、わが国のモーパッサン翻訳史に大きな特徴があるが、モーパッサン紹介には疎漏があるのは、書誌作成上さけることができない。モーパッサン紹介の跡を明治期だけに限って記してみよう。

これよりいま筆者が諸雑誌から拾ったモーパッサンに関する記事を掲げてみよう。

モーパッサンの名前が、わか国の紙上に最初に現れたのはいつのことかはっきりしないが、明治二十一年（一八八八）九月のことではなからうか。小崎弘道の「国民の理想」（『国民之友』所収、明治21・9）に、モーパッサンの名が散見する。

シヨヘンハウエルは婦人を以て一種高尚なる人類となす貴婦人の思想を破砕したるとを誇れるが、現にフラウベルト、ゾーラ、マウパザン等が著はしたる小説には、此高尚なる思想あるを見ざるなり、……

(二八九一)

明治24・5・25……「鷗外文語 其三 今の英吉利文学」(『文学評論』) しがらみ草紙』所収) に、モーパッサンの名が出てくる。

英吉利にはアルフオンス、ドオデエもなく、又たモオパッサンもあらず。

(二八九二)

明治25・3・12……雑誌記事または書物中の記事を抜いて訳したものか、「論説の實際派を論ず(無名氏訳)」(『女学雑誌』第三〇八号所収) に、  
モーパッサンの名が多出する。

ゾーラはわれら既に之に聴くその実験説は われら既に之を了すいでやゾーラを謝してモーパッサントの説を聴かむ。モーパッサントはゾーラと同臭なり  
自然派の一味なり(中略)

モーパッサントが「真之二字耳矣」といひけむは動かす可らざる定則にあらず。  
(中略) 予をしてゾーラとモーパアサントとの二家を追ひ現今實際派の真相を看せしめよ

(二八九三)

明治26・8・25……「仏国文学者モウパッサン逝く」(『早稲田文学』所収) は、モーパッサンの逝去を伝えた記事である。

仏蘭西の文壇厄多し ルナン没しテーン去り 今またモウパッサン遠逝す 本年の春『国民新聞』が掲げし『欧米文学現状の一斑』にいふ 彼れはゾ  
ラ、ドオデーと共に写真派小説家の三勇将と呼ばれ 同派の元祖ともいふべきフローベルの薫陶を受けたりき(中略)

ゾラと彼れとを比較せば 或は数歩を譲らざるべからずと雖も文に彫琢なく 卒直明晰にして精確なる観察力に富みたれば 往々ゾラを抑へて彼れを  
揚ぐるもありといふ 昨日以来発狂の為、筆とる事能はざりしが 四十四歳を一期として遂に他界の人とはなれり (S. H. 稿)

注・S・Hとは島村抱月（一八七一～一九一八、明治から大正期にかけての評論家・劇作家、のち早大教授）のことであろう。

（二八九四）

明治27・1・12……「明治二十六年文学界一覧表」（これは過去一年間の新刊本、新聞紙、雑誌その他の諸現象中の重要なものを集録して一覧表としたもの。『早稲田文学』所収）の中に、モーパッサンの死について、一行みられる。

七月

仏国の小説モウパッサン逝く

（二八九四）

明治27・2・3……「海外思潮 仏国文学の新潮」（『国民之友』所収）に、モーパッサンの名がみられる。

文学は生活の反映なりとせばブルジェー氏がフラム雑誌に寄せたる『仏国文学の道徳的新潮』は仏蘭西に於ける道徳的復活の時期終に到来したるの徴として喜ぶ可し（中略）彼等は只日常の出来事にあらはれたる平凡の生活を描きたり。モーパッサンの格言を以て言へば、彼等の目的は卑き真理にあり、……

（二八九六）

明治29・3・7……「雑録 仏国学士会院（上）」（『国民之友』所収）に、モーパッサンの名がみられる。これはフランスの学士院を皮肉った記事である。「アカデミーフランセーズ」は、一六三五年の創立であり、会員は四〇名である。

ヴオルテールは「趣味の保存所」と称し、アルフォンス、ドオデーは「空肚の偶像」と云ひ、ラコルデルは「仏国智識の元老院」と賛し、モウパ

スサンは「死し及およ四十老人の演劇」と罵ののる。

(二八九六)

明治29・4・10……「海外騒壇 ○小ジウマ」(『国民之友』所収)に、三文豪のひとりとしてモーパッサンの名が引かれている。

二世アレクサンドル、ジウマは一千八百廿四年を以て生る。小説家ジウマの子なり。人あり若し仏国近代の三大小説家を誰れとか為すと問はば、バルザック、ジオルヂ、サン、フロオベエルを以てす可く、輒ばん近きんに降りて之を選まば、ドオデエ、ゾラ、モオパッサンの三文豪を以て之に当つるを得。

(二八九六)

明治29・4・10……「海外騒壇 キップリングの近業」(『帝国文学』所収)に、同人に匹敵する者はモーパッサンであるという。

キップリングは千八百六十四年印度孟買インド孟買に生れ、夙つとに文筆の才を以て新聞業に従事せしが、八十九年印度を去て絶東諸国を巡遊し、数年わがくに前吾邦を過てすアメリカに渡り、終に英国に至りぬ。此時既に数卷の小説を著あらはして令名を為し、特に短篇の勁健せいけんなるを以て称せられたり。Plain Tales from the Hillsの小話集は、仏蘭西近代の名家モオパッサンの作品と比肩するに足れり。

(二八九七)

明治30・5・20……「海外文壇 ○スカンヂナビアの小説(『太陽』所収)に、デンマークの小説家ヘンリック・ポントピダン(二八五七―一九四三)は、モーパッサンを思い出させるとある。

ヘンリック、ポントツピダンの『好望地』(Det Forjaettede Land)は、其処女作『薬剤師の娘』を去る六年目にて吾人(われわれ——引用者)の手そのにすることを得たり、ポントツピダン元来ユウモリストにして、其技そのわざに健全快潤けんぜんくわいじゆんの点多おほきがため、吾人をして往来わらいモオパッサンを連想せしめずんばやま

ず、…

(二八九七)

明治30・8・10……論説「上田敏 仏蘭西文学の研究」(『帝国文学』第三卷第八号所収)は、フランス文学に対する趣味を日本国民に目覚めさせ、日本文学を大成させることを意図し、フランス文学のよいものを選疑したものか。日本においては英語やドイツ語の勢力は漸次学界に広まって来ているが、フランス語はふるわず、活発なる勢力ではないのである。仏語はフランス法を研究している者の間に潜んでいるにすぎないという。

上田が本稿を寄稿したのは、ヨーロッパ大陸最大の文学——フランス文学の研究を喚起するにあつた。この稿の中にモーパッサンの名がみられる。

吾等は仏国小説の光榮ある歴史を終るに、ギイ、ド、モオパッサンの名を以てすべし。彼はフロオベエルを師として小説を学びぬ。始めて刺を通して(相手に名を知らせて——引用者)フロオベエルに見へ、小説を以て文壇に立たむことを語る。フロオベエル即ち教へて曰く、足下今車に駕して(馬車で)吾慮を訪ひ給ひしならむ。往てまた之に駕し、巴里の大道、眼に触る、所を描写して吾に示せと。モオパッサン直に教を奉して写真の術を究め、漸く撰択の法を解し、省筆(よく調べて書く)の技に熟し、集沖(多くのもの一か所に集まる)の美に達し、終に美術的作品を成しぬ。(中略) 鋭き眼と確なる手とこれ美術家の二大資格なり(中略)。

近代仏蘭西小説の觀念を得むと欲せば、ドデエ等の長篇を読むの傍、モオパッサンの短篇を精読すべし。

(二八九七)

明治30・9・10……論説「上田敏 近英の散文」(『帝国文学』第三卷第九号所収)は、近代における英文学の散文について論じたものであるが、ステイブソンやキップリングの作品にふれた折に、モーパッサンの名を引き合いに出している。



彼（キップリング——引用者）が短篇の小話は、浩瀚なる官府文書よりも、植民地の情態を闡明して（明らかにする）詳なりといふ。而して此等短篇の文致は仏蘭西近代の名家モオパッサンの筆路に負ふ所多し。

（二八九八）

明治31・3・3……「彙報」（いろいろの知らせをあつめたもの） 文学 ◎短篇小説（『早稲田文学』所収）に、モオパッサンの名が出てくる。

日常個人の身上に起る詩的事件の一端を取りて之れを Story となし、Sketch となし、彼のモウパッサンの筆に倣ひ、若しくはキップリングが短篇に摸す（まねる）、……

（二八九八）

明治31・5 ……「海外騒壇○伊太利の新作家」（『帝国文学』第五卷第四十一号所収）に、モオパッサンの名がみられる。

仏国はまたウゴオ、ミユツセエの後、所謂『バルナツシヤン』の詩社を出し、（中略）。又小説界に於ては、モオパッサン、ロチ、等他邦人の決して模倣すること能はざる短篇等は、優に欧州文壇の覇を稱するに足る。

（二八九八）

明治31・7 ……雑録「西海枝静 トルストイ翁の新美術論」（『帝国文学』所収）に、モオパッサンの名がみられる。

世界的卑俗的小説儀型を指示するには（中略）、モリエルの喜劇、ヂッケンスの『コベルフィリト』及び『ピク井俱樂部』ゴ、ル、プシキンの小説、モンパスサン并にヂュマの或る作品は慥に批判に属すると答ふべし。

(一九〇〇)

明治33・2・23……森林太郎著『審美新説』（春陽堂）に、メリメやモーパッサンの名がみられる。

予<sup>不明</sup>□の然る所以<sup>しか</sup>を求むるに、往々<sup>おつち</sup>簡淨明快<sup>しとく</sup>の調<sup>い</sup>これを致<sup>いた</sup>すを見る。Mérimee, Maupassant 等<sup>これ</sup>即是<sup>なり</sup>なり。

(一九〇〇)

明治33・6・15……「第五部 上田敏 文芸史 第二章 十九世紀の仏蘭西文学」『太陽』第六卷第八号所収）に、モーパッサンの名と作風と著作についての短い記事がある。『太陽』第六卷第八号は、版元の博文館の創立十三年を記念する臨時増刊号である。「十九世紀」における世界文明の発達を明らかにしようとしたものであり、各部の記事論説はいずれも専門家が執筆している。

「第五部 文芸史」（一七六―一九九頁）は、上田敏の分担部分であり、この長編論文は―序論にはじまり、十九世紀の英文学、フランス文学、ドイツ文学、イタリア・スペイン・北欧・東欧・新ギリシヤの各文学、および十九世紀の絵画・彫刻・建築・音楽などについて―論じている。

モーパッサンについては、つぎのように記している。

現欧<sup>げんおう</sup>現時<sup>げんじ</sup>の文芸<sup>ぶんげい</sup>に波動<sup>はつぱく</sup>し、モウパッサン（一八五〇―一九三）ゾラ（一八四〇生）ゴンクウル兄弟（一八二一―一八五）ドディ（一八四〇―一九七）等を生じて仏蘭西小説今日の盛況<sup>さか</sup>を至<sup>いた</sup>せり。

モウパッサンの短篇小説「メイゾン、テリエ」（一八八二）「ロンドリ姉妹」（一八八四）「ムッシウ、バラン」（一八八五）等は 観察<sup>くわんさつ</sup>の犀利<sup>きり</sup>と文辞<sup>ぶんじ</sup>の明潔<sup>めいけつ</sup>とを以<sup>もつ</sup>て、古今<sup>ここん</sup>独歩<sup>どくぽ</sup>と賞<sup>しょう</sup>すべく、「ピエル、エ、ジャン」（一八八八）「死の如く強し」（一八八九）「われらの心」（一八九〇）の諸篇<sup>しよへん</sup>も現代社会<sup>げんたい</sup>の描写<sup>びやう</sup>として頗<sup>すこぶ</sup>る精覈<sup>せいかく</sup>なり（よく調べてある）。

(一九〇一)

明治34・5・27……田山花袋の『野の花』(新声社刊)の「序」に、モーパッサンの名が出てくる。

此頃の私の考を言つて見やうなら、今の文壇は余りに色気沢山ではあるまいか。一方にはロオマンチズムの幽霊の様ながあれば、一方には不自然極る妖怪談のやうなのがある(中略)

モーパッサンの「ベル、アミ」や、フローベルの「センチメンタル、エチケイション」などは 自然派の悪弊が雑つて居ないために、何処かに大自然の面影が見えて 人生の帰趣が着々として指さされる。

(一九〇二)

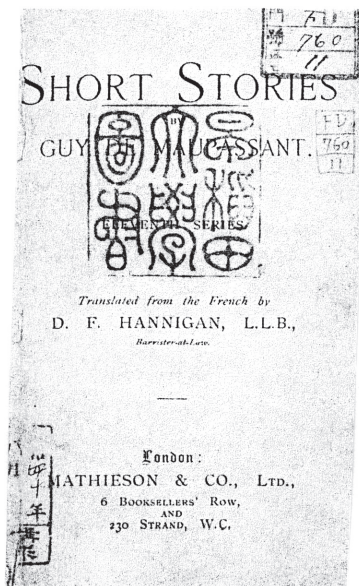
明治34・6・17……「西花余香」は、田山花袋が『太平洋』に発表した雑誌記事である。この中にモーパッサンの名がみられる。かつてフロベールやゾラが唱えた自然主義は、いまでは大いに趣をかえ、革新の色をおびてきているという。

モーパッサンは人間を明かに紙上に出して、それを飽まで客観的に描写したるに止まりたれど、今の革新派は具象的な一箇の主観ありて、理路明かに幽玄界に大胆なる足跡を付けんとせり。

(一九〇二)

明治35・5・1……丸善の『学燈』は、モーパッサンの著作全十一冊が入荷したことを伝えている。これは原書ではなく、英訳本である。この新着本案内には、書名や版本についての言及はないが、おそらく「ズィ・アフターディナー・スイアリース」(The After-dinner Series)の『ギィ・ドゥ・モーパッサンの短篇小説』ロンドンのマスイスン社刊——Guy de Maupassant's Short Stories, Mathieson & Co., London)のことをいっているであろう。

いま日本の文学界ではモーパッサンが流行し、諸雑誌にその翻訳をよくみるという。また独訳本もたくさん到着したとい



ズィ・アフターディナー・スィアリーの『ギイ・ドゥ・モーパッサンの短編小説』（マシスン社刊）の第11巻の表紙。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

っている。

注・この版本はこんにち入手困難である。早大本は第一巻目が欠けている。

△ モウパッサンの『The Short Stories』全十一冊取揃へ新著仕り候。此篇は二三年前より逐次出版し来りたるものに候が、此度第十一冊目を発行して終結致し候。モウパッサンは夙に短篇を以て聞え、小説の妙味は煩雜なる長編に存せずして単純なる短篇に却て見ゆると主張し、短篇の伎倆に到っては 近來多く匹<sup>不明</sup>なきは普く評壇の一致する処に御座候。

昨今我が文芸界に於ては、モオパッサン類りに流行し、到る処の文学雑誌、モオパッサンの翻訳を見ざるは無ければ、モオパッサンの名は広く読書社会に知れ渡る事と存じ候。然るにモオパッサンは、頗る極端なる写真主義を把持し、最も大胆に忌憚なく、人生の暗黒面を暴露したるが故に、此大胆を欠ける訳文には到底其本色を認め得がたく候。此短篇集十一冊は、即ち最もモオパッサンを知るべき短篇全集にして、消閑の読書としては、之に上越すもの無之候。

△モオパッサン 其他最近著名の作家の著に係る独訳（或は独文）小説も亦数多到着仕り候。

(二九〇二)

明治35・8・1……「中村蝶二 外国文学の流行」(『文藝倶楽部』第八卷第二号所収)に、モーパッサンの名がみられる。外国文学が流行しているが、それによって日本の文学界は裨益をうけていないという。外国文学は、オウムのような文学者によって皮想的に紹介されているにすぎず、そ

やく吟味してわが特有の思想の中に同化されていないという。

(かれら)は徒らに新らしきを追ひ、奇を好み、モーパッサン流行すと聞けば、直ちに之を翻訳して一時の名声を貪らむと試み、ゴルキー流行すと聞けば、また直ちに之を翻訳して一時の好尚に投せむとつとむ。

(一九〇二)

明治35・11・5……「長谷川天溪 答弁二則 ○不自然は果して美か(文学士 佐々醒雪君に与ふ)」(『太陽』所収)に、モーパッサンの名が  
みられる。

醒雪君は、漠然たる意味に於いて、不自然を説く。これ予の氏が意見を採らざる所以なり(中略)更に吾人は言はむ、吾が小説界は、未だ充分に写実主義を咀嚼せず。吾が所謂写実派とは何ぞや。皮相の模倣に外ならざるにあらずや。固より欧州の一派にも此の弊あり(中略)。  
其の弊として或は科学を誤解したるもあらむ(ゾラの如く)或は事実其の物に束縛せられたるもあらむ。これゾラの弟子たるユイスマンス、モーパッサン等が、ゾラを棄たる所以なり。

(一九〇二)

明治35・11・10……「彙報 九月の文壇」(『早稲文学』所収)に、モーパッサンの名がみられる。

老子爵はモオパッサンの翻案なるべきか。

注・「老子爵」は田山花袋が『文学界』に発表した作品。

(一九〇八)

明治41・1 ……「モウパッサンの自然主義」(『早稲田文学』所収)は、相馬御風(一八八三〜一九五〇、明治・大正期の詩人、評論家、早大英文科卒)が執筆した長編論文(二一八〜二三九頁)である。モーパッサンの狂死——アーサー・シモンズの評——モーパッサンとゾラ——モーパッサンと西鶴——「ベラミー」の梗概——トルストイの評——勇敢なる戦士か——などから成る。  
相馬はモーパッサンの人生をしめくくって、つぎのように述べている。

(前文略) モウパッサンこそ真に自然主義文芸の勇者と云はざるを得ない。彼れは終に『人生の真』を得ずして死んだ。(中略) 惜しい哉、彼れは自らを出した人生の真相に対する苦悶の爲めに終に自ら倒れてしまった。吾人は彼れを以て最も勇敢なる人生の戦闘者と讃うべきであらうか、……

(一九〇九)

明治42・1・15……「戸川秋骨 丸善回顧」と「評論の評論」(無署名)、『文章世界』第四卷第一号所収)に、モーパッサンの名が散見する。

戸川秋骨(一八七〇—一九三九、明治期の評論家、英文学者)は、丸善の二階で柳田国男(一八七五—一九六二、明治から昭和期にかけての民族学者)と会った際に、つぎのような話を耳にはさんだ。

君が中央公論に書いた文章の爲に、丸善にあの本を買いに来た者が非常に沢山あった相だと云ふのである(中略)あの本と云ふのはマウパッサンの『女の一生』の事であるからである。僕は其を思ったから、何れ風俗壊乱的な文字を見たくて買ひに来たのであらう……

内田さんは即ち其の位置にあるのである。マウパッサンの短篇は盛に訳された。あれは本が安価で文章が解し易くて風俗壊乱的な文字が沢山あって、其て短かく数ページで完結している、流行らざる得ないではないか。

注・内田とは、内田魯庵(一八六八—一九二九、明治期の評論家・小説家、のち丸善の顧問)のことである。

「評論の評論」の執筆者によると、作家には「見出す作家」と「見出さぬ作家」、また画家的作家、心理学者的作家があり、この二つに分けられるという。見出す作家とは——説明と抒情と小主観に陥る弊がある者。見出さぬ作家とは——平凡と無意味と悪写生に捉われる弊がある者である。画家的作家とは——描写に委曲をつくし叙事抒情に長じているが、心理にその筆がふれえない者。心理学的作家は——描写叙述にあまり重きを置かぬ者。まず心理をつかむ、性格を了解する者である。後者は……

日本でいふと、国木田君などにさうした処がある。正宗君もさういふ方の質の人だと思ふ。西洋で言ふと、モーパッサンがさうだ。チエホフがさうだ。

(一九〇九)

明治42・1 ……「永井荷風 モーパッサンの旅行日記」(『早稲田文学』第三八号所収)は、モーパッサンの人と作品の概略を述べたのち、

同人の地中海あたりよりシシリー島にいたる旅行についてふれた小記事である。

思索家テーン(テーム)によりて、「憂鬱(ゆううつ)なる牡牛(おすうし)」の名を得たるモーパッサンの痛(いた)しき生涯と悲しき作品とは、最初上田敏氏によりて、一度我国に伝へられしより、世の作家争ひて此れを訳述したれば、今又、多く云ふの要なかるべし。

モーパッサンの著作は自らモーパッサンの生涯を語りて充分なり。

(一九〇九)

明治42・11・1……「赤門文芸の変遷」(『無名通信』所収)に、モーパッサンの名が出てくる。

赤門文芸など、云ふ狭苦(せまくる)しい標題をうけたことが、そも／＼赤門出の文学者には気に向くまいと思ふ。(中略)その赤門の文芸はまた日本文壇の上に相応な献替(けんたい)をも為(な)して来(き)てゐると云ふことは、之れは公平な見方であらうと思ふ。

奇蹟(ミラクル)ならばそれもあらうけれども如何(いか)に赤門でもイブセンを一夜で産み出すことは出来まい、ツルゲネーフ、ゾラ、モーパッサンとても同じと。

モーパッサンの短篇作品の邦訳についていえば、明治初年から同二十年代にかけて皆無であるが、三十年から四十年代にかけて諸雑誌(『国民之友』『早稲田文学』『帝国文学』『文藝倶楽部』『小天地』『明星』『藝苑』『太陽』『新小説』『文藝界』『万年草』『新聲』『中学世界』『文庫』『新古文林』『文の友』『新潮』『白百合』『文章世界』『三田文学』『新思潮』『スバル』『英語世界』『青鞥』など)にひんばんに発表される。

大西忠雄の「明治期のモーパッサン輸入資料」(『日本比較文学界会報』「その一」)、「その十一」から短篇の訳を拾うと、明治三十年代は約七十点、同四十年代は約六十点ほど訳されており、枚挙にいとまがないほどである。

\*

文芸は荷風にとって少年のころから、離れがたい友人<sup>20</sup>であった。中学生のころから成島柳北（一八三七〜八四、もと幕臣、侍講、明治前期の戯作家）の著述に興味をもち、その作品の模倣をおこない、のちに広津柳浪の小説をよむようになってからは、その作品に敬服し、その模倣を雑誌に発表するようになった。やがて模倣作品をつくることにいや気がさし、外国文学の世界に興味をもつようになった。

柳浪のもとを去り、巖谷小波（一八七〇〜一九三三、明治・大正期の小説家・童話作家）の「木曜会」に出席するようになるにつれて、そこで出会った生田葵山（一八七六〜一九四五、小説家。東洋英学塾にまなぶ）や黒田湖山（一八七八〜一九二六、小説家。東京専門学校にまなぶ、キップリングの翻訳がある）らから、外国文学をしきりと鼓吹された。ゾラやモーパッサンの名をはじめ聞いていたのも、この文学サークルにおいてであったろうか。

「われその頃より友人に教へられて かのモオパッサンが短篇小説読み始むるほどに……」（随筆「葡萄棚」大正7・8）と語っている。まずよくわからないながらも、鷗外の『美奈和集』（著作訳文集、明治25年刊）から入った。が、原文について外国文学を読み味いたといった思いが強くなった。英語の知識がすこしあったので、イギリスの女流小説家ジョージ・エリオット（一八一九〜八〇）やアメリカの小説家ナサニエル・ホーソン（一八〇四〜六四）の作品をよんでみたが、語学力がじゅうぶんでないため、おもしろ味を感じるに至らなかった（我が思想の変遷）。しかし、あるとき何気なく、フランス作家エミール・ゾラ（一八四〇〜一九〇二）の英訳本を繙いたところ、訳文もよみやすく、かれの旧文芸に対する反抗の態度がじぶんの性質に合うように思われ、一冊ずつ読みはじめ、ほとんどゾラのものを読んでしまった。人生の暗黒面をじっさい観察して、その報告書をつくるのが小説家のしごとであると思った。

ゾラの作品を読むことによって、荷風の心境は一変した。<sup>21</sup> やがてかれは文学仲間にもモーパッサンを推賞するようになった。荷風はいつ、何によって小説家モーパッサンの存在を知り、どのような作品を最初によんだのであろうか。

どうもかれがモーパッサンの名をはじめ知ったのは福地源一郎（一八四一〜一九〇六、明治期のジャーナリスト、歌舞伎改良家）の弟子・榎本虎彦（一八六六〜一九一六、明治期の歌舞伎狂言作者）からであり、<sup>22</sup> ついで明治三十年代に上田敏の翻訳を通じてのようだ。その翻訳とは――



「文反古」(もおぼつさん作)……明治三十二年(一八九九)五月『帝国文学』に掲載。原作は“Mlle. Fifi”所収の“Le Lit”  
「あろり火」(モオパッサン)……明治三十三年(一九〇〇)十二月『帝国文学』に掲載。原作は“Mlle. Fifi”所収の“La Bûche”

である。が、この二篇は完訳でなく、全体を縮めた縮訳である。「文反古」は、競売で手に入れた祭服の中から、僧院長に宛てた黄色の色あせた女の何通かの手紙が出てきた。その一通には、寝床こそ人の一生のすべてです、とあった。人が生まれるのも、愛するのも、死ぬのも、みな寝床の上なのです、とあった。

「あろり火」は、親友の細君に誘惑され、ソファアの上でくちびるを合わせていたとき、暖炉のたきぎが客間の中に飛び込んで来たので、とっさに男は立ち上った。そのときちょうど親友がもどって来たので、醜態をみられずにすんだ。そのたきぎがなかったら、男はぬれ場の現場をとり押えられるところであった。あんな経験はこりこりとの思いから、男は独身を通したという話。

若き日の荷風がヨーロッパの文物や風物に興味を抱くはずみを与えられた文学者は二人いた。一人は森鷗外(一八六二〜一九二二)、小説家・評論家)、もう一人は上田敏(一八七四〜一九二六、外国文学者・評論家)である。荷風は鷗外の文学評論集の『月草』(春陽堂、明治29・12)や翻訳長編小説『即興詩人』(『しからみ草紙』『めざまし草』に連載)、敏の海外文芸論——ことに『太陽——臨時増刊(第六卷・第八号)——十九世紀』(明治33・6)に収録されたヨーロッパ各国の「文芸史」から大きな感化をうけたといっている(『書かでもの記』)。とくに『第二章 十九世紀の仏蘭西文学』をよむことによって、じぶんの将来の方針が決定した。すなわち、まずはフランス語を学び、フランスの地を踏もうと……。

荷風がよんだといっているモオパッサンの作品を文献資料からひろって掲げると、つぎのようになる。

(一九〇五)

明治38・8……モオパッサンの『水の上』(Sur l'eau)を原書でよみはじめた。同書はワシントンのブレンタノ書店で求めたもの。荷風は「モオパッサンは革盛頓府のブレンタノと云ふ書店にて初めて購ひ候事」(昭和19・12・22付、谷崎潤一郎宛書簡)といっている。一冊一ドル五〇セント(「断腸亭日乗」昭和18・3・19付)。イデイスと別れる際、モオパッサンの著作の大半を買ってもらったという『ふらんす物語』。

(一九〇六)

明治39・6……モーパッサンの『詩集』(Des Vers)、『女の一生』(Une Vie)、『テリエ館』(La Maison Tellie など)をよむ。

〃 7……『ベラン』(Bel Ami)をよみはじめ。

〃 9……『イヴェット』(Yvette)をよむ。

〃 10……ニューヨーク五番街のブレンタノ書店で『ロンドリ姉妹』(Les Soeurs Rondoli)をもとめ。

荷風は購入したモーパッサンの作品を、赤エンピツなどで書入れをしながら読んでいたようである。アメリカ時代に求めたフランス書の大半は仮と日本であったため、リヨンに赴いたときオペラ座前の書店で二冊三フランで皮綴にしてもらったという(『断腸亭日乗』、昭18・3・19付)。荷風にとって、書棚にならんだ皮装丁のフランス本を見ることは、老後のたのしみでもあった。

\*

一 荷風の蔵書。

明治四十一年(一九〇八)七月、荷風はアメリカ、フランスで五年ちかい歳月を送ったのち帰国すると、ひとまず牛込区大久保余丁目七十九番地の父の家に入った。その後、住所を転々と変え、大正九年(一九二〇)五月、麻布市兵衛町一丁目六番地の高台に百坪の土地を借り、そこに洋館を新築して「偏奇館」と名づけた<sup>(23)</sup>。市兵衛町の由来は、元禄八年(二六九五)にいたって名主の名前をとって「市兵衛町」としたもので、江戸時代そこは岡場所(官許の吉原以外の遊郭)であったが、天保の改革で取り払われた(『港区史 上巻』、東京都 港区役所、昭和35・3)。〃偏奇〃とは、風変わり、ふつうとちがった趣がある、という意である。

偏奇館は、建坪二十、庭つきであった。家は東南の崖に面していた。崖には竹林があった。崖下の人家の多くは庭があり、花を植えていた。偏奇館は病を養ひ、静かに読書するには最適な所であった。偏奇館がある番地は、あたり一帯がすべて六番地であったから、訪問する記者を惑わすのにつごうがよかった。門を出て細い道を数十歩ほど行くと、街路に達した。その道は下ったり登ったりする谷に似ていた(『偏奇館漫録』)。

このペンキ塗りの家に入ると、玄関口から三、四メートルほどの廊下がまっすぐ貫いている。その奥の右手が台所。台所の前から、二階にのぼ



麻布市兵衛町の偏奇館の図

る階段がある。二階には客間兼書齋と寝室がある。客間兼書齋の広さは、十畳か十二畳である。西壁はすこし壁面を残しているが、その一面に書棚がある。本棚ならんでいるのは、――

鷗外全集（初版本）

漢籍を収めた帙（書衣）

和本の積みかさね

仮とじのフランス書

などであった（佐藤春夫『小説 永井荷風伝』）。

玄関のすぐ左脇は小さな応接間になっており、そこに小机と円い小卓、小さな椅子が二つ三つと長い藤椅子が一つ置いてあった。その部屋の正面にガラス戸のついた

本箱があって、その中には――

フランスの小説本

フランスの詩集

などが、ぎっしりとつまっていた。これらのフランス書以外に、森鷗外全集がまじっていた（中河興一『二度の光栄』『三田文学 永井荷風追

悼』六月号所収、昭和34・6）。

荷風は、三四十歳ごろまで、蔵書をあまり珍重せず、人に貸してなくされても惜しむような人間ではなかった。しかし大東亜（太平洋）戦争がはじまり、西洋のもののすべてが輸入禁止になってから考えが変わり、大切にしようになった。<sup>(24)</sup> また市内の諸処をたびたび移転したので、本の持ちはこびにこまり、処分した本もあったようである。

昭和十八年（一九四三）三月十九日——荷風は旧蔵のモーパッサンの短篇集数冊が、神田神保町の進省堂という古本屋の店頭飾り出された、という電話を知人から受けたので、日が暮れるころ、それを見に出かけた。売値は、何んと一冊五十円（いまの五十万円ぐらい）であった。店頭陳列窓にあったモーパッサンの作品は、ワシントンのブレントノという書店で一冊一ドル五〇セントで購入したものであり、リオンで一冊三フラン払って皮綴じにさせたものであった。モーパッサンの紀行『水の上』もその数冊の中にあった。

大正七年（一九一八）——荷風は思うところあって断腸亭を引き払い、築地の路地裏に引っこすとき、蔵書の置き場にこまり、和本屋の竹田にたのんで大半を二足三文で売却した。その中にあったモーパッサンの著作が、いま一冊五〇円という法外の値がつけられていた。荷風は当時の思いの品であるその三冊を買いもとすと、それを再読しはじめ、明け方まで読みつづけた（『断腸亭日乗』）。

昭和二十年（一九四五）——このころになると、日本各地は毎日のように米軍の空襲をうけた。同年三月九日、夜半麻布方面——長垂坂あたりで起った火は、たちまち西北の風にあおられて市兵衛町二丁目の表通りまで迫ってきた。荷風は枕元の窓から異常に明るい光が射して来たのと、隣人らの叫び声におどろき、日誌と草稿を入れた手さげカバンをもって庭に出、遠近の火を見た。遠くの北方の空は赤く、また近くの谷町にも火の手が上った。

火の手は刻一刻と偏奇館にも迫り、隣家のドイツ人フロイドル・シュペゲル氏の檜の木と荷風の庭にある椎（ぶな科の常緑高木）にも燃え移った。やがて隣家は火中に崩壊した。火災は偏奇館の二階にも移り、三十余年前に欧米で求めた小説や詩集なども他の多くの書物といっしょに灰じんに帰ってしまった（永井荷風「羅災日記」『Vita Nova 新生』所収、昭和21・3）。灰塵となったものの中には異国でよしみを結んだ女性の写真もあったかも知れない。荷風は羅災の翌々十一日に焼け址を訪れたとき、二十六年の久しきに渡って暮した住居と蔵書のすべてを失ない、万斛の涙を注いだ。

三月十日の猛火は、東京の大半を灰にしてしまった。戦後、荷風は小門勝二（一九一三～一九七七、随筆家・荷風研究者、毎日新聞社記者）と会った際に、往時を回想してこんなことをいった。

——あ、本ですか、ぼくはもう本のことについて、そんな心配はないですよ。だまっていたって、だんだんたまちまいますから適当な高さになったら、くず屋へ売ればいいんですよ。(中略)

家の中、本で埋めてみましたが、せっかく苦労して集めたら空襲でみんな焼けしまいました。どうせなにかのときに焼けるんですから、もう集めたっしょうがありませんよ。いくらぼくが守ったって、政府がその気で戦争なんかするんですから、見込みはないですよ。軍部が強いとか、政府は確実ななんていうのは、ありゃ宣伝ですからね。

その証拠には、ぼくの偏奇館は焼けしまいましたもの……。だからぼくは、できるだけ早く身辺のものを整理しておくんですよ。ぼくは払いに出した本の買い値がいくらでもいいんです。安いからって怒ることはないですよ。部屋の中がさっぱりするだけ、こっちの得ですからね。……

注・小門勝二記「最後の反俗作家——荷風の死とその周辺」(『サンデー毎日』所収、昭和34・5)。

これは晩年の荷風が、戦災によって失ったものに対して何の未練もなく、あっけらかんと語った談話である。荷風はよわいを重ねるにつれて、物に執着しなくなり、やがて訪れる死の覚悟をしていたのであろう。かれは亡くなる三年前の昭和三十二年(一九五七)三月——市川市八幡町四丁目に一六〇万円を投じて小さな家(六・四半・三)をもとめ、静かに余生を送った。家は新しいのだが、そこでの生活は掘立小屋での暮らしと大きな違いはなかった。部屋の中に万年床と七輪があり、その七輪でコーヒーをわかった。

荷風は徹底した無物主義であったようだが、部屋の中のバタ屋風景と奇妙な対照をなしていたのは、蔵書であった。奥の一間(四畳半か三畳の間)に、幅一間(一、八メートル)、高さ二間の本棚があった。本棚は四段ほどあったものか、そこにはつぎのような本がぎっしりと詰っていた。

最上段……………「森鷗外全集」

第二段……………「幸田露伴全集」

「荷風全集」

第三段(?)……………フランスの文学書(エミール・ゾラのレ・ルゴン・マッカール叢書

注・『サンデー毎日』(昭和34・5)より。

晩年、荷風は女性にも興味がなくなり、無欲でんたんな人になった。かれにとって死ぬことは決して悲しいことでもさみしいことでもなかった。あの世に行けば、森鷗外や上田敏の両先生にも会えるからである。荷風は若いときから病気をこわがらなかった。人間はどうせ病気で死ぬものだからである。もし死んだら……

——世界の外へ行きます。ゾラやモーパッサンとも会って、先生の全集を読んできました、とあいさつするな。そうしたらゾラやモーパッサンはどんな顔をするだろう。為永春水（たねながしゅんすい）（二七九〇～一八四三、江戸後期の戯作者）なんかは、ぼくの顔を見たら泣きますよ。ぼくもそのときは泣くかもしれないな。……芸術家っていうのはそんなものですよ。

生前、荷風はさいごまで信頼していた小門勝二に語った。

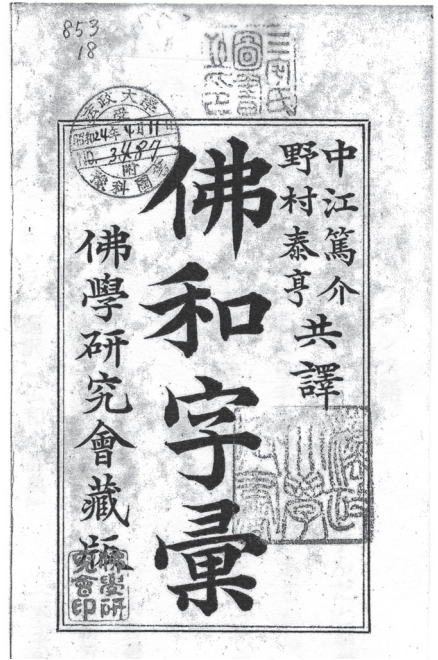
——ぼくが死ぬときは、ポックリと死にますぜ。森鷗外は床（とこ）の間の柱（はしら）によりかかったまま、大いびきをかいているうちに死にました。ぼくは鷗外を崇拜していますから、きっとぼくもそうなりますよ。

荷風は『死の希望』とは裏腹に、胃かいようで血を吐いて亡くなった。享年七十九歳であった。

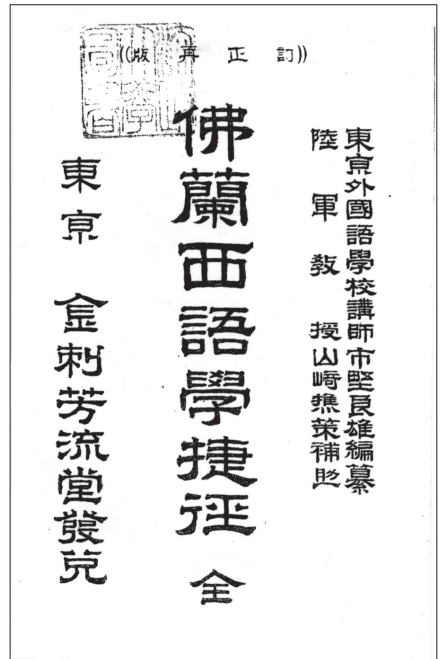
\*

一 荷風のフランス語。

荷風は暁星の夜学でフランス語を学んだと明言しているが、習った教師名、用いた教科書、辞引や参考書（文法書、訳読書）については何も語っていない。いまなら手引書は無数にあるから、初学者は辞引や参考書にこまることはないが、当時はまだ語学の参考書はすくなかった。明治二十年代における比較的良好な仏和辞典は、中江兆民（一八四七～一九〇一、明治期の自由民権思想家）と仏学研究会会員らが纂訳して成った『仏和字彙』（仏学研究会蔵版、明治26・12）であった。荷風がフランス語を学んだ明治三十年代の半ばには、フランス本国の辞典を参配し、簡を採



中江兆民と仏学研究会々員らが作った『仏和字彙』(明治26・12刊)。〔法政大学附属図書館蔵〕



『佛蘭西語学捷徑・全』(フランス語の文法書)。〔明治37年(1904)刊〕。〔法政大学附属図書館蔵〕

って編んだものや宣教師との共編のもとにつくった、つぎのような仏和辞典が現われた。

- 野村泰亨 著 『仏和新辞典』 (大倉書店発行、明治三十四年)
- 中沢文三郎 著 『仏蘭西語学捷徑 全』 (金刺芳流堂、明治三十七年)
- 市野良雄編纂 『仏蘭西語学捷徑 全』 (金刺芳流堂、明治三十七年)
- E・ラゲ編訳 『仏和小辞典』 (天主教教会、明治三十八年)
- 小野藤太 E・ラゲ共編 『仏和会話大辞典』 (天主教教会、明治三十八年)

これらの仏和辞典は、必ずしも実用に足るものではなかったが、無いよりかましであった。本格的な仏訳辞典の出現は、大正十年(一九二二)四月に刊行された、『模範仏和大辞典』(白水社)まで待たねばならなかった。

荷風の作品をよむと、フランス語の単語のカタカナ表記が気になることがある。たとえば、いくつか実例をあげてみよう。

〔原つづり〕

〔荷風の表記〕

〔カナによる近似的発音表記〕

|                         |                              |                                                  |
|-------------------------|------------------------------|--------------------------------------------------|
| Seine                   | セーン河 <small>が</small> またはセイン | [sen se:ns]                                      |
| café                    | カフエー                         | [kafe kafue]                                     |
| Rhône                   | ローン河                         | [ro:n ro:ns]                                     |
| Verlaine                | ベルレーン                        | [verlen velerle:ns]                              |
| Boulogne                | ブーロンユ                        | [bulɔŋ bu:roni:ju]                               |
| Carnaval                | カルナワルの祭                      | [karnaval karna:va:aru]                          |
| Faubourg                | フォープルグ                       | [fobu:r fo:pu:ru]                                |
| Salon d'automne         | サロンドートン                      | [salɔ̃ dɔ̃tɔ̃n sarondo:otons]                    |
| Luxembourg              | リュクサンブルグ                     | [lyksabu:r ryuku:sanpu:ru]                       |
| Lamartine               | ラマルチン                        | [lamartin lamalchi:ns]                           |
| Thérèse Raquin          | テレーズ・ラカン                     | [teire:z rake tele:z rakɑ̃]                      |
| Fortune                 | フォルチュン                       | [fortyn fo:lte:juns]                             |
| Le Siècle               | ルシエークル                       | [la sje:kl ru:sie:ku:ru]                         |
| Le Ventre de Paris      | ルワントル ドパリ                    | [la vɑ:tr da pari ru:va:ntɔ̃tu:ru do:pa:ri]      |
| Une Page d'amour        | ユン パージ ダムール                  | [yn pa: ʒ danu:r yun pa:ʒju: damu:ru]            |
| Au Bonheur des Dames    | オーボンノール デダム                  | [o bonoe:r de dam o:bonno:ru de:dam]             |
| La Joie de Vivre        | ラジョワ ドビープル                   | [la ʒwa da vi:vʁ la ʒjo:v do:vui:puru]           |
| La Bête Humaine         | ラベート ユーメン                    | [la bet ymen la bet ymen yu:men]                 |
| Le Docteur Pascal       | ルドクトール バスカル                  | [la doktoe:r paskal ru:do:ktu:ru paska:ru]       |
| Les Quatre Evangiles    | レーカートル エバンヂール                | [le katr eva:ʒil le:katu:ru eva:ʒi:ru]           |
| Madeleine Féral         | マドレーン フェラ                    | [madlen fera madle:ne fe:ra]                     |
| La confession de Claude | ラコンフェッション ドクロード              | [la kɔ̃fesiɔ̃ da klo:d la konfesi:jon do:kro:do] |

注・永井荷風著『新編ふらんす物語』(大正4・11・23)より。



フランス字母の第五字——eは「エ」ともいうが、ふつうは「ッe」と発音する。荷風はこの「ッe」の音を正しく発音していなかったようだ。またフランス語の綴りなどときどき誤って書くことがあった。

高橋邦太郎氏（一八九八〜一九八四、仏文学者、日仏交流史研究者、東京外語仏語部を経て東大仏文科卒。築地小劇場の文芸部員、サイゴンで終戦を迎えた）がはじめて荷風に会ったのは、大正十三年（一九二四年）のころか。なんでも東大の仏文科の学生であり、築地小劇場の文芸部員であったころ、銀座のカフェ・タイガーの二階で紹介されたという。その後ずっと高誼をたまわったという。ある夜「きゆうべる」というカフェで、堀口大学、ノエル・ヌーエット、高橋、荷風ら四人が会ったことがある。その夜の話題は、文学というより、風俗に関したものであった。筆者は高橋氏と何度かお会いする機会があったが、上野池の端の自宅にフランス人の来客があると、よくフランス語で会話していた。このときも荷風は、ヌーエットと二こと三ことフランス語を話したかもしれない。高橋氏は荷風のフランス語について、こんなことをいっている。

——先生の仏語は能弁ではなかったが、会話は巧みだった。（中略）

先生の仏語については、世間でいろいろと説を為すものがある。甚しいのは、先生は余り出来ないという人さえある。名前は挙げないが、ある作家もその一人である。そのせいか、先生は、始終、自分の詩に手を入れておられた。ヴェルレーヌの詩は、いくたびか改訳されている。この点、非常に敏感であられた。

ぼくたちからみると、かえって改訳の方がなじみがなくなり、つまらなくなってしまうので、それを申上げると、顔をふって、「だってはっきりわかっている誤訳はいやですからね」といわれた。この時の先生は至って真面目で実に良心的であった（高橋邦太郎「荷風先生と仏文学」『三田文学 永井荷風追悼号六月号』、昭和34・6・1）。

荷風は自宅（偏奇館）でけっして客を迎えることはなかったが、家の近くの「山形屋ホテル」とか銀座でなら、人と気軽に会って談笑した。また家には浴室がなかったので近所の銭湯に出かけた。森鷗外と上田敏の推薦で明治四十三年（一九一〇）四月から慶応義塾大学部文学科において、

フランス文学史論を三田キャンパス内のヴィッカーズ・ホールで講じるようになると、週に一度フランス人が、ホールの応接間にかれの勉強の相手をするために来ていた。一つには、フランス語を忘れないために会話の相手をしてもらうため。二つには講義の下調べのとき、疑義が生じたとき、その質疑に答えてもらうためであった。

\*

一 荷風のモーパッサン作の訳業について。

荷風がはじめてモーパッサン作「水の上」(*Sur l'eau*, 1888)を解説をつけて『早稲田文学』(第三八号)に「モーパッサンの旅日記」の表題のもとに掲げたのは、帰国した翌年の明治四十二年(一九〇九)一月のことであった。ついで「ロンドリ姉妹」(*Les Soeurs Rondou*, 1885)の部分訳をまず「紅茶の後」〔其四〕(『三田文学』所収、明治43・12)の中に添えたが、のちに「夏の町」として中編小説「すみだ川」に収録され、『新小説』に発表したのは、同年十二月のことであった。ついで「夜」(モーパッサンの旅行記の一節) (*La vie errante* 中の“*La nuit*”, 1890)が、『早稲田文学』(第五六号)にのったのは、明治四十三年(一九一〇)七月であった。

「水の上」と「夜」の二篇は、いずれも抄訳であるが、多少修正を加えたうえ、『珊瑚集』(粉山書店、大正二年「一九一三」四月刊)に収録された。

荷風は、これらの二作をどのように訳したのか、その冒頭の部分を原文といっしょに並べて吟味してみよう。

その前にこれら二篇の物語の梗概をのべておこう。「水の上」(一八八八年刊)は、人生に倦みつかれた主人公が「ベラミ号」といったヨットに乗って地中海南岸を約一週間周遊する話である。その小帆船はニースを出帆すると、アンティープ(フランス南東部、カンヌの北東九キロの港町)——カンヌ——サン・ラファエル——サン・トロペ——などに寄ったのち、再びアンティープにもどり、ついでモナコに赴く。この遊弋記を書いたところのモーパッサンは、異常な心理状態にあり、現実描写と夢想が吐露されている。

荷風訳は、原作の途中から始まり、途中で終わっている。完訳ではなく、抄訳というか縮訳である。まず原文を引く……

—Beau temps, monsieur.

Je me lève et monte sur le pont. Il est trois heures du matin ; la mer est plate, le ciel infini ressemble à une immense voûte d'ombre ensencée de graines de feu. Une brise très légère souffle de terre.

Le café est chaud, nous le buvons, et sans perdre une minute pour profiter de ce vent favorable, nous partons.

Nous voilà glissant sur l'onde, vers la pleine mer. La côte disparaît ; on ne voit plus rien autour de nous que du noir. C'est là une sensation, une émotion troublante et délicieuse : s'enfoncer dans cette nuit vide, dans ce silence, sur cette eau, loin de tout. Il semble qu'on quitte le monde, qu'on ne doit plus jamais arriver nulle part, qu'il n'y aura plus de rivage, qu'il n'y aura pas de jour. A mes pieds une petite lanterne éclairer le compas qui m'indique la route. Il faut courir au moins trois milles au large pour doubler sûrement le cap Roux et le Drammont, quel que soit le vent qui donnera, lorsque le soleil sera levé. J'ai fait allumer les fanaux de position, rouge bâbord et vert tribord, pour éviter tout accident, et je jouis avec ivresse de cette fuite muette, continue et tranquille.

これを荷風は、つぎのように訳している。

## 水の上

アゲー 四月八日

「晴れたり。モツシュー。」

吾は起き出で、甲板に昇れり。午前三時。限りなき空は、灯火点々たる、潤き円天井の影にも似たり。微風陸地より来る。

珈琲のあつきを啜りて、吾等は順風の一瞬時だも仇にせじとて出発す。

波の上を滑り行きて、忽ち大海の面に出れば、沿岸は隠れて、暗夜の中、一物の眼に映するなし万物より遠かつて、水の上、寂々の境、空々たる夜の中に進み行く、爽快と不安の感覚、感激の妙正に此の時にあり。身は人の世に遠かりて而も何処の岸辺にも達する事なく、夜も亦決して明くる事なきが如く感ぜずや。吾が足元なる小さき灯は、進路を示すコンパスを照す。日出る時何方にも吹く風あらば、ドラモンとルーの崎を廻りて、岸に添ひ少くも三海里を走らざる可からず。不測の災禍なからん為め、左舷には赤く右舷には緑色したる灯を点じて吾は恍惚として響なく、絶え間なき静安の逸走を喜

大過たいかのない訳といえよう。が、ところどころ難点があることは否めない。文頭の *Beau temps* は「すばらしい天気」の意である。が、荷風は「晴れたり」と訳している。つぎに男性に対する敬称としての *monsieur* (ムスィエ) は、荷風の発音だとすこしおかしいが、そのまま音訳し「モツシュー」となっている。原文の三行目にある *la mer est plate* (海はおだやか) は、訳されていない。欠落している。 *une immense voûte d'ombre* (闇の広大な丸天井) は、「潤うるき円天井の影」と訳されている。

*sans perdre une minute* (一分間もむだにしない) は、荷風訳だと「一瞬時あだでも仇にせじとて」となっているが、「仇あだ」は「徒あだ」(むだの意) という文字を当てべきか。 *Il faut courir au moins trois milles au large pour doubler sûrement le cap Roux et le Drammont* は (ルウとドラモンの岬を安全に回るには、沖合を少なくとも三マイル走らねばならない) の意である。荷風訳には原文に該当するものがない、「陸あだに添あだひ」の字句が加えてある。

「夜」(*la nuit*) も縮訳である。同作品を収録している「放浪生活」(*La vie errant*, 1890) も紀行文である。作者はカンヌを船出したのち、イタリアのジェノバ——フィレンツェ——パレルモ(シシリー島)——カタネオ——アルジェリア(アフリカ)——チュニス——スース(チュニジア中東部の港町)などを、約半年間旅をした。そのときの印象を記したもので、一種の文明批評である。原文の冒頭の一節をひいて、荷風の訳しぶりを見てみよう。

#### LA NUIT

SORTIS du port de Cannes à trois heures du matin, nous avons pu recueillir encore un reste des faibles brises que les golfes exhalaient vers la mer pendant la nuit. Puis un léger souffle du large est venu, poussant le yacht couvert de toile vers la côte italienne.

C'est un bateau de vingt tonneaux tout blanc avec un imperceptible fil doré qui le contourne comme une mince cordelière sur un flanc de cygne. Ses voiles en toile fine et neuve, sous le soleil d'aout qui jette des flammes sur l'eau, ont l'air d'ailes de soie argentée déployées dans le firmament bleu. Ses trois focs s'envolent en avant, triangles légers qu'arrondit l'haléine du vent, et la grande misaine est molle, sous la flèche aiguë qui dresse, à dix-huit mètres au-dessus du pont, sa pointe éclatante par le ciel. Tout à l'arrière, la dernière voile, l'artimon, semble dormir.

Et tout le monde bientôt sommeil sur le pont. C'est un après-midi d'été, sur la Méditerranée. La dernière prise est tombée. Le soleil féroce emplit le ciel et fait de la mer une plaque molle et bleutée, sans mouvement et sans frissons, endormie aussi, sous un miroitant duvet de brume qui semble la sueur de l'eau.

Malgré les tentes que j'ai fait établir pour me mettre à l'abri, la chaleur est telle sous la toile que je descends au salon me jeter sur un divan.

## 夜

(モオパッサンが旅行記の一節)

永井荷風

暁の三時にカンの港を出で、夜陰に入江より沖の方に流る、微風の猶止まざるに乘じたりしが、やがて力なき陸風のみ吹来りて、帆を載ける小舟をば伊太利亜の岸边の方に追ひやりぬ。

二十噸ほどの帆船は真白くして、眼に見えざるばかりの一条の金線は白鳥の横腹に綱をつけたるが如く船体をめぐりたれば、新しく柔き帆布は水に照る八月の日光に、宛ら青空に銀色の絹の翼打広げたるに異ならず。風を孕める軽き三角形の嘴帆三枚は前方に飛翹し、甲板の上には十八米突も、鋭き矢の如くに其の頂きを空中に閃かしたる櫓の下に、大なる帆は柔くふくらみたれど、後には舳の帆の眠りて居たり。

暫くにして一同は居眠りぬ。地中海の面に夏の昼過ぎ来りて、名残の微風は止み、暴悪の太陽は空に漲り、海の汗かと思えて閃めく霧狭の中に、海水をして青く軟く沈みて眠れる鉛の板の如くならしむ。日避けにとて作りたる天幕の陰ながら、炎暑はわれをして船房に下りて臥床の上に横はらしむるほどなりき。

翻訳の常道として、頭から読み下さず、荷風はうしろからひっくり返って訳している。しかも訳文をみじかく断ち切ることなく、一思いに訳している。そのためすゞイメージをつくることはむずかしい。冒頭に「カンの港を出で……」とあるが、カンとはどこか読者にはわかりにくい。やはりカンとすべきであろう。un léger souffle du large est venu (沖からそよ風が吹いてきて) は、荷風訳だと「力なき陸風のみ吹来りて」となっている。large は名詞であり、「沖」の意である。荷風がいう「陸風」とは、陸地から海へむかって吹く風のことである。la grande misaine est molle は、「大きな前部マストはたるんでいる」の意であろうが、「大いなる帆は柔くふくらみたれど……」と訳している。

et fait de la mer une plaque molle et bleutée (そして海をやわらかな、青みがかった平面にしている) は、荷風訳では「海水をして青く軽く沈

みて眠れる鉛の板の如くならしむ」となっていて、原意をゆがめかつ潤色している。

\*

「紅茶の後」「其四」(『三田文学』明治43・12)に発表になった「ロンドリ姉妹」の部分訳は、つぎのようになっている。  
原文と訳文を併置してみよう。

Changer de place me paraît une action inutile et fatigante. Les nuits en chemins de fer, le sommeil secoué des wagons avec des douleurs dans la tête et des courbatures dans les membres, les réveils éreintés dans cette boîte roulante, cette sensation de crasse sur la peau, ces saletés volantes qui vous poudrent les yeux et le poil, ce parfum de charbon dont on se nourrit, ces dîners exécrables dans le courant d'air des buffets sont, à mon avis, de détestables commencements pour une partie de plaisir.

Après cette introduction du Rapide, nous avons les tristesses de l'hôtel, du grand hôtel plein de monde et si vide, la chambre inconnue, navrante, le lit suspect. — Je tiens à mon lit plus qu'à tout. Il est le sanctuaire de la vie. On lui livre nue sa chair fatiguée pour qu'il la ranime et la repose dans la blancheur des draps et dans la chaleur des duvets.

C'est là que nous trouvons les plus douces heures de l'existence, les heures d'amour et de sommeil. Le lit est sacré. Il doit être respecté, vénéré par nous, et aimé comme ce que nous avons de meilleur et de plus doux sur la terre.

『……転地といふ事は無益な仕事としか思はれない。汽車で明す夜、車にゆられて身体や頭の痛くなる睡眠、さては動いて行く箱の外で腰の痛さに目が覚める。皮膚が垢だらけになつたような気がする。いろ／＼な塵が髪や眼の中へ飛込む。スウ／＼風の這入つて来る食堂車でまづい食事をする。其等は私に云はせると旅行と称する娯楽の嫌悪すべき序開である。

先この急行列車の序開があつた後には旅館の淋しさ、人が一ぱい居ながら如何にもがらんとした広い旅館、見も知らぬ気味悪い部屋、怪気な寢床の淋しさが続いて来る。私には何がさて置き自分の寢床ほど大切なものはない。寢床は人生の神聖なる殿堂であつて、人は生活を赤裸々にして羽毛蒲団の暖さと敷布の真白さが中に疲れたる肉を活気付け、又安息させる。

戀愛と睡眠の時間、吾々が生存の最も楽しい時間を知るのには寢床である。寢床は神聖だ。地上の最も楽しく最も好いものとして敬ひ尊び愛さねばなら

ぬものだ。

『ロンドリ姉妹』という作品は、男女の戯れの恋をテーマとしている。イタリア旅行に出た男二人が、車中でフランチャスカというイタリア女性と知り合い、三週間ジェノバで同棲する。男のうち一人が、翌年女を訪ねてみると、彼女は結婚していた。が、母親からカルロッタという妹を紹介される。二人は急きょ恋人同志となり、半月の間ねんごろな関係をつづける。おかげで前の女（姉）には未練を感じずすんだ、という話。

les réveils éreintés dans cette boîte roulante (この移動式の箱の中で目が覚めたときは、へとへとになっている)の部分は、荷風訳だと「さては動いて行く箱の外で腰の痛さに目が覚める」となっている。ce parfum de charbon dont on se nourrit (いやというほどかがされる煤煙ばいえんにはほい)の箇所は、荷風訳に見あたらず、欠落している。Epiduは「急行」ではなく「特急」の意か。

\*

荷風は帰国後、ときどきフランス近代詩の翻訳紹介に手を染め、諸雑誌に発表し、ついでそれらをまとめて『珊瑚集』(靑山書店、大正2・4)と題して上梓した。

本書はかれの翻訳詩文集、評論集である。同書には、ボードレル、ランポー、ヴェルレーヌ、ゴージェ、レニエ、サマンその他詩篇が、あわせて三十八篇収録されている。それらの詩は、いずれも自分の好みになかったものばかりであり、辞書の助けを借りながら愛読玩味したすえ、日本語に移したものである。

ヴェルレーヌは七篇訳されている。またアンリ・ドゥ・レニエを十篇訳しており、荷風の好尚こうしょう(このみ)がしのばれる。いまヴェルレーヌの詩を一篇抜いて、かれの訳しぶりを見てみよう。

まず「感傷的な対話」(Colloque Sentimental)を取りあげてみよう。これは二行詩ル・デュエインツ(一つの詩節が二詩句によって形成されたもの。脚韻は平韻)である。

Dans le vieux parc solitaire et glacé,  
Deux formes ont tout à l'heure passé.

Leurs yeux sont morts et leurs lèvres sont molles,  
Et l'on entend à peine leurs paroles.

Dans le vieux parc solitaire et glacé,  
Deux spectres ont évoqué le passé.

— Te souvient-il de notre extase ancienne ?  
— Pourquoi voulez-vous donc qu'il m'en souvienne ?

— Ton cœur bat-il toujours à mon seul nom ?  
Toujours vois-tu mon âme en rêve ? — Non.

— Ah ! les beaux jours de honneur indidible  
Où nous joignons nos bouches ! — C'est possible.

— Qu'il était bleu, le ciel, et grand, l'espoir !  
— L'espoir a fui, vaincu, vers le ciel noir.

Tels ils marchaient dans les avoines folles,  
Et la nuit seule entendit leurs paroles.



道 行 おなじく

寒いさむしい古庭に  
今し通つた二つのかたち。

眼おとろへ唇ゆるみ  
ささやく話もとぎれとぎれ。

寒いさむしい古庭に  
昔をしのぶ二人のかげ。

——お前は楽しい昔の事を覚えてゐるか。  
——なぜ覚えてゐると仰有るのです。

——お前の胸は私の名をよぶ時いつも顫へて、  
お前の心はいつも私を夢に見るか。——いいえ。

——ああ私等二人唇と唇とを合はした昔  
危い幸福の美しい其の日。——さうでしたねえ。

——昔の空は青かった。昔の望みは大きかった。  
——けれども其の望みは敗れて暗い空にと消えました。



“二人の影”の図。

烏<sup>からすむぎしげ</sup> 麦<sup>な</sup>繁<sup>か</sup>つた<sup>た</sup>問<sup>な</sup>の<sup>な</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ば</sup>な<sup>し</sup>、  
夜<sup>よる</sup>より<sup>ほ</sup>外<sup>か</sup>に<sup>き</sup>聞<sup>き</sup>く<sup>も</sup>の<sup>は</sup>な<sup>し</sup>。

第一連の中にみられる Solitaire (人けのない) は、訳文では削られている。Ton entend à peine leur paroles は、「二人の話し声がよく聞えない」の意であるが、荷風はこの箇所を「さややく話もとぎれとぎれ」と訳している。ふつう日本語で「話とぎれとぎれ」というと、話に切れ目ができることを意味する。第三連の中の Deux spectres ont évoqué le passé は「二つの亡霊は過去を思い起した」の意である。荷風はこの文章を「昔をしのぶ二人のかげ」と訳している。漢語で「影<sup>かげ</sup>」といえは、「まぼろし」や「幻影」を意味する。

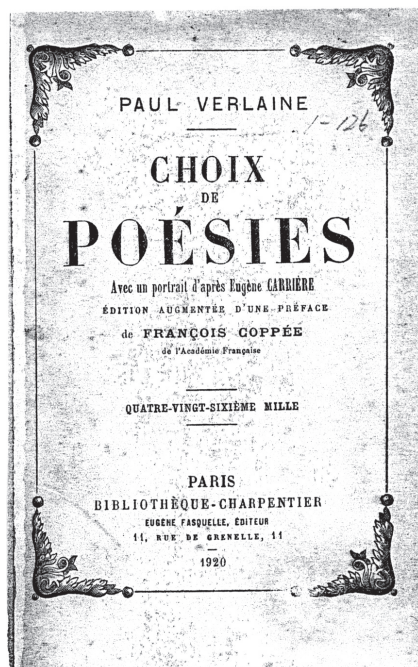
les beaux jours de bonheur indécible は、「ことばで言い表しやうもない至福の時代」ほどの意味であろうが、荷風は「危<sup>あぶな</sup>い幸福<sup>しこうふく</sup>の美しいその日」と訳している。この一文は文意が通らない。そして C'est possible は、「忘れてしまいました(そうかも知れない)」の意であるが、「そうでしたねえ」と訳されている。Tels ils marchaient dans le avoine folles は、「そういつたかれらはカラス麦の中に足を踏み入れた」の意であろうが、「烏<sup>からすむぎしげ</sup> 麦<sup>な</sup>繁<sup>か</sup>つた<sup>た</sup>問<sup>な</sup>の<sup>な</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ば</sup>な<sup>し</sup>」と訳している。

この詩篇の舞台は、古い公園である。季節は冬である。公園には人けがなく、凍てつくように寒い。

恋を失った二人の幽霊がついさつき通りすぎて行った。この二人は、かつては人間の男女であったが、いまは幽界に住んでいる。かれらは思い出に満ちた、かつての逢瀬<sup>あわせ</sup>(あいびき)をたのしんだ公園で再会し、よろこびにうっとりとした昔を思い出し、ことばをとりかわす。現世に立ち帰った二つの魂が、返らぬ過去を追憶するというのがこの詩のテーマであろう。

口語で訳された荷風の訳詩を味読すると、あたかもそれが愛し合う男女の恋の末路——こしかたの恋への尽せぬ追憶のような印象を受けるのは、ひとり筆者だけであろうか。しかし、原作者ヴェルレーヌが意図した原画はいかなるものであったのか。おそらくかれは幽界に住むかって恋人であった二つの魂がおりなす恋の迷い、恋の哀楽、恋への執着を神秘的に描こうとしたものであろう。「あいびき(道ゆき)は、文切型的な文学表現であり、ローマン主義派の詩人らははげしい恋の想い出を不滅化するきらいがあった。ヴェルレーヌはこの詩の中で、一切が死滅することを読者に教えている。現世においては、いつまでも存続するものは何もないのである。恋も命もいくつかは消滅するのである」(ドゥマルヌ氏談)。

いずれにせよ、荷風は原詩の世界をじゅうぶんに理解してはいなかった。かれは感覚本位に原作を解釈し、わが身の恋愛の思い出を訳筆をとり



荷風が「道行」を記すとき用いたのと同じ版本。  
[東京大学文学部図書館蔵]

ことによって、己れの感情や文辞をみがぐにあつた（「訳詩について」）。

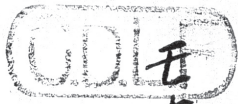
\*

荷風のフランス語の力をみる材料がもう一つある。モーパッサンの大小の作品は、ほとんど日本語に移されたが、邦人の手になるかれの伝記となると、ないにひとしかった。が、版元である実業之日本社の依頼により、かれは伝記の執筆を引きうけた。しかし、ひとりでやるには仕事の荷は重すぎたものか、後藤末雄<sup>すえお</sup>（一八八六—一九六七、小説家、フランス文学者）と分担して執筆した。そして成ったのが――

『モオパッサン  
永井荷風  
後藤末雄』（実業之日本社、大正4・6）

である。同書（全三三七頁）は四篇構成となっている。

ながら再構築しようとした。結果的には原作の世界をゆがめることになったが、皮肉にも原作より訳詩のほうが遙かに滋味<sup>じみ</sup>に富んだものになった。訳詩がもつ独特の一抹の哀感は、切切とふかくわれわれ読者の胸に迫ってくる。諧調のひびきも心地よい。余韻が残るような、甘く切ない訳詩である。……訳詩は必ずしも言語的に正確に訳されたものではないが、表現が簡潔で力がある。荷風の運筆の才、美の認識力、国語力には目をみはるものがある。かれが敬愛する森鷗外や上田敏にならって西洋の詩を日本語に移植しようとしたのは、この兩人のように西詩の余香<sup>よこ香</sup>（かおり）をわが国の文学界に移入紹介しようとするためではなかった。そうではなくて、西詩を訳す



モーパッサン  
永井荷風  
後藤末雄

モーパッサンの伝記の表紙。〔筆者蔵〕

第一篇

少年時代と青年時代

永井荷風述作

第二篇

創作の準備時代

一〇二七頁。

第三篇

作品

後藤末雄の述作

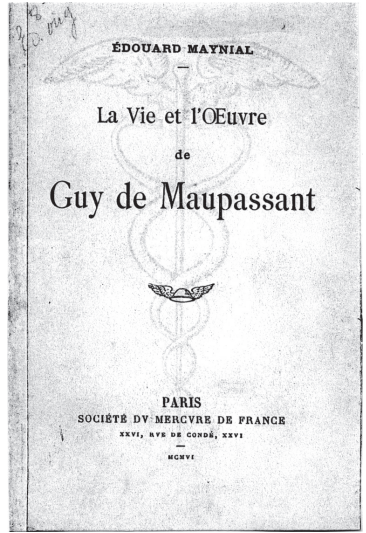
第四篇

病癒と死

一二八〇三三七頁

何の変哲もない装丁の同書は、こんにち稀覯本にちかい。内容はモーパッサンの人と作品を紹介したにすぎず、日本人としての独自の見解を見ることができぬものである（吉田精一『永井荷風』、塙書房、昭和28・11、一三四頁）。

荷風がモーパッサンの評伝を書くさいに依拠した種本を明らかにすることができる。それはモーパッサンの伝記としてかなり流布した、つぎの



『モーパッサン』（実業之日本社）を執筆するとき利用した版本。〔筆者蔵〕

書である。

Édouard Maynial : *La Vie et l'Œuvre de Guy de Maupassant*, Société du Mercure de France, Paris, 1904

エドワール・メイニアル著『ギイ・ドゥ・モーパッサンの生涯と作品』メルキュール・ドゥ・フランス社、一九〇四年刊

荷風は「章」の立て方から話の中味まで、メイニアルの著書に依っている。原文と荷風の述作を並置し、検討してみると、かれの敷き写しのよすががよくわかる。

#### PREMIÈRE PARTIE

1850-1870

#### ANNÉES D'ENFANCE ET DE JEUNESSE

I

Henri-René-Albert-Guy de Maupassant naquit le 5 août 1850, au château de Miromesnil, commune de Tourville-sur-Arques, la Seine-Inférieure, à 8 kilomètres de Dieppe (1). La date et le lieu de sa naissance ont donné lieu à plusieurs erreurs ou confusions dans certains dictionnaires de biographie. Peut-être ces erreurs proviennent-elles de l'acte de décès de Maupassant, tel qu'il figure à la mairie du xvi<sup>e</sup> arrondissement, à Paris, et qui est ainsi rédigé :

L'an mil-huit-cent-quatre-vingt-treize, le sept juillet, à neuf heures du matin. Acte de décès de Henri-René-Albert-Guy de Maupassant, âgé de quarante-trois ans, homme de lettres, *né à Soltenille près Yvetot* (Seine-Inférieure)... etc.

Le château de Miromesnil n'appartenait pas à la famille de Maupassant, qui l'avait pris en location. C'était « un de ces châteaux battus des brises du large, dont le vent d'équinoxe emporte au loin les tuiles, péle-mêle avec les feuilles des hétraies (2). » Après ses couches, M<sup>me</sup> de Maupassant revint s'ins-

taller à Eretat, et c'est dans ce village que Guy passa ses premières années.

Le père de Guy, M. Gustave de Maupassant, appartenait à une ancienne famille lorraine, qui fut anoblie par l'empereur François, époux de Marie-Thérèse.

## 第一篇

少年時代と青年時代

——千八百五十年より千八百六十年まで——

一

アンリー・ルネ・ギー・ド・モオパッサンは千八百五十年、八月十五日にミロメニルの館邸グヤトで生れた。このミロメニルといふのはセーヌ河の下流に位するトールヴィル・シュール・アルクに在る町で、ヂエーブから八キロメートルほど離れてゐた。出生の年月と場所とが、人名字書に錯誤を來したことが多かった。この誤は巴里の第十六区々役所にある死亡証書から出たものらしい。死亡証書には斯うかいてあった。

「千八百九十三年、七月七日、午前九時死亡、アンリー・ルネ・アルベール・ギー・モオパッサン。四十三歳、文士、セーヌ下流、イヴトオ附近、ソットヴィルに生る。」

ミロメニルの館邸グヤトはモオパッサン家のもではなかつた。借りてゐたのであった。その館邸は彼岸の風に吹かれると、楓かえでの葉と一緒に瓦を飛ばされることもあった。

さてモオパッサンの母は、彼を生んでから、エトルターといふ村に歸つてきた。此の村でモオパッサンは少年時代を過したのであった。

モオパッサンの父親は、ギユスターヴといつて、ローレンの古い家族に属

してゐたが、マリイ・テレーズ皇后の夫君であつたフランソワ皇帝のおかげで貴族に列することが出来た。さうして侯爵にまで上つたのであつた。

メイニアルが記すところの文章と、荷風の文章をつきくらべてみると、両者の文章はほぼ一字一句おなじであることがわかる。荷風は種本の原文をよく理解しているが、多少意味を取りちがえている所もある。モーパッサンの生年月日は、一八五〇年八月五日と原文にあるが、どういふわけか八月十五日としている。「ローレン」(地名)は、「ローレーヌ」と表記すべきであるし、「さうして侯爵まで上つたのであつた」は、荷風の作文であり、かつ誤記である。les feuilles des hêtresは、「ブナの葉」の意であるが、荷風は「楓の葉」としている。ぶなとかえでは別物である。

メイニアルのモーパッサン伝の第一部の(五)のさいこの一節は、つぎのようになっている。荷風はこれをつぎのように転写した。

La paix rétablie, Maupassant partit pour Paris, et ici commence une nouvelle période dans l'histoire de sa vie. Les années d'enfance, l'éducation maternelle, le contact journalier avec la nature normande, tous les rêves de jeunesse, les projets littéraires, les ambitions secrètes sembleront s'éloigner pour quelque temps, et céder la place à des habitudes et à des préoccupations différentes. Le changement est surtout apparent, et nous aurons à montrer comment la vie parisienne ne fit guère qu'affiner un tempérament déjà tout formé et prêt à s'affirmer en une oeuvre personnelle.

普仏戦争が済むとモーパッサンは巴里へむけて出発した。此処で彼の経歴中の新しい時期が始まつたのであつた。少年時代、母親の教育、自然との接触、青春の空想、文学上の計画、秘密の野心などは暫らく消え去つて、様々の習慣や心労に代つてしまった。殊に変化が著しかった。さうして巴里生活が如何ほど彼の氣質を変じたか、その経路を知るの面白い事であらう。

原文と対照してわかつたことだが、荷風のフランス語はけつしていい加減なものではなく、一定でいどの学力はあつたように思える。われわれは翻訳や述作において、ときにすこしごまかしたりする。が、荷風も誤訳、粗漏(手ぬかり)、誤解、省略などを避けえなかつた。

\*

荷風はモーパッサンの作品を味読することによって何を利用し、何を同化していったのか。

荷風は原書をよまないかぎり、真にその小説を味うことができない、といった考えから、原書主義に徹した。かれはモーパッサンの著作をよむことによって、その精神はどのような感興を受けたのか。かれがモーパッサンの作品の中に見いだした逸興（格別のおもしろ味）とは何であったのか。

モーパッサンの作品は、時代と国境をこえ、よりによって日本へ渡り、それに心酔傾倒する一作家によって愛読されたばかりか、その中味のある物は秘かに形を変えて利用された。モーパッサンが荷風にあたえた感化はじつに甚大であった。国際間の文学的関係の歴史——一作品の他国における波動、普及、模倣、成功のあとをたどる研究分野を、こんにち比較文学と呼ばれている。

荷風に及ぼせるモーパッサンの影響について、これまで諸家が言及した研究の大略をしめすと、左記のようになる。

(一九五三)

昭和28・11……「羊羹」<sup>ようかん</sup>、「腕時計」(二十一年十一月)「或夜」<sup>あるよる</sup>「靴」<sup>つぽ</sup>「噂ばなし」(同十月)「畦道」<sup>あぜみち</sup>(同十二月)等の短篇には、モオパッサンのかけがえのないやうに思う(吉田精一『永井荷風』塙書房、昭和28・11、一三三六頁)。

(一九五四)

昭和29・6……小品「葡萄棚」<sup>ぶどうかき</sup>(「断腸亭雜藁」所収)は、モーパッサンの短篇“*Tombales*”(『メゾンテリエ』所載)を意識したもの。「醉美人」<sup>（一九〇五年春カラマズで執筆）</sup>に於てモーパッサンの最初の翻案がなされた。これは Allouma の翻案であることは間違いないという。

以下、モーパッサンの感化がある作品は、つぎのようなものである。「長髪」(この小説にモオパッサンの感化がある——佐藤春夫の指摘)、「雪のやどり」<sup>（これはアメリカ版「メゾンテリエ」——河盛好蔵の指摘）</sup>、「寝覚め」<sup>（一月一日）</sup>「悪友」<sup>（祭の夜がたり）</sup>「霧の夜(原題「除夜」)(伊狩章「永井荷風とモーパッサン——その比較文学的考察」『国語と国文学』所収、昭和29・6)。

(一九五七)

昭和32・12……『あめりか物語』『ふらんす物語』を通じ、モーパッサンの影響と見られるもの十篇、そのうち翻案は「醉美人」「悪友」「祭の夜がた



り」の三篇、モーパッサンを粉本としたのは「夜半の酒場」「雪のやどり」「夜の女」の三篇、その構成や題材を借りたのは「春と秋」「林間」「寢覚め」「二月一日」の四篇となる（伊狩章『後期硯友社文学の研究』矢島書房、昭和32・12、二五七頁）。

(一九七〇)

昭和45・10……「除夜」がモーパッサンの同巧異曲の作である『ロンドリ姉妹』を想わせるほかに……（後略）。

黒人娘を同僚の兵士にゆずる話の「林間」には、“*Le remploi*”が娼婦を描いた「夜半の酒場」や、「夜の女」には、同じような話の『メエゾン・テリエ』が、母を虐待する父を憎む「一月一日」にも同じ構想の“*Gargon, un bock*”が、兄の旧友で放埒の末女術となつた「悪友」には、妻や妹に娼婦をいとなませる“*L'ami patience*”がというふうになつて、かなり材源のはっきり求められるものがあり、性的倒錯をあつかつた「長髪」、田舎娘が娼婦に転落する「雪のやどり」、随落した女事務員をくどきそこねる「寢覚め」などにも、モーパッサンの退廃と技法とがうかがわれるよう（成瀬正勝「永井荷風集解説」『永井荷風集』第29巻所収、角川書店、昭和45・10、二五頁）。

(一九七六)

昭和51・4……「牧場の道」と“*Fou*”（狂人）、「醉美人」と“*Les Soeurs Rondoli*”（ロンドリ姉妹）、「長髪」と“*La Moustache*”（口髭）、「夜の女」と“*La Maison Tullier*”（メゾン・テリエ）に類似点がみられるという（赤瀬雅子「四『アメリカ物語』とモーパッサン」『永井荷風とフランス文学』所収、荒竹出版株式会社、昭和51・4）。

\*

#### 一 荷風に及ぼせるモーパッサンの影響

—小品「葡萄棚」と*Les Tombeles*（墓場の女）との関係。

荷風の「葡萄棚」(ブドウのつるをはわせるための棚)という小品は、浅草公園に出没し、客をひろっている私娼との体験談である。主人公はその女にそでを引かれ、谷中あたりにある怪しい寺に行き同衾したという話である。

物語は回想のかたちをとっている。主人公が二十ほどになった秋の一日——浅草伝法院の裏手にある小路を歩いていた、十四、五歳の銘酒屋の娘にそでを引かれた。かれはその娘といっしょに気の抜けたビールを一杯のんだ。（注・銘酒屋というのは、銘酒を飲ませるといふ看板をあげ

て、ひそかに売淫をさせた遊女屋のことで、明治から大正にかけて見られた。

やがてその娘に誘われ魔窟に行く話がまとまる。娘は先に立って歩いていった。主人公は女のあとをついて行くと、やがて町家の間にある小さな寺に至った。それまで娘は、たえず身のまわりに気をくばっていたが、門の中に入ると、安心したのか、主人公に身をすり寄せ、その手をとると、庫裡（寺の台所）の裏手に導いた。すでにあたりは暗かったが、そこにブドウ棚がみられた。

娘は寺の奥のはなれ座敷のような所に主人公を案内すると、破れた押し入れから夜具を取りだし、それを煤けた畳のうえに敷いた。主人公は、どのようなわけか知らぬが、なぜ寺が浅ましき女の隠家になっているのか知りたと思った。しかし、事をすませると、早々に立ちのくことにした。帰りぎわに本堂のほうで木魚をたたく音がしたが、その音色はものういものであった。

この小品は、帰朝後約十年たった大正七年（一九一八）八月の作である。この小品には「あと書き」が付いていて、それには

われその頃より友人に教へられて　かのモオパッサンが短篇小説読み始むるほどに、曇りし日の葡萄棚のさま、何となく彼の文豪が好んでもものする巴里の好事の中にもあり気なる心地せられて遂に忘れぬ事の一つとはなりけり。

この文章は、モーパッサンの短篇「墓場の女」(Les Tombes)を意識したものという(伊狩章「永井荷風とモーパッサン——その比較文学的考察」)。モーパッサンの「墓場の女」は、パリのモンマルトルの墓地に現われる私娼を描いたものである。荷風はこの作品について、

パリの浮世の計り難きは、墓地に偽り泣きて物に打れ易き感情家を誘ひし女もありしと云ふ、モーパッサンが小篇を思はしめたり（「墓詣」）。

と記している。ところで、「墓場の女」とは、どのような作品なのか、いまその梗概をのべるとつぎのようになる。

裕福な中年の男が五人いる。そのうちの三人は、既婚者。二人は独身である。かれらは月にいちど集まると、食事をしながら、よもやまの話をして時をすごす。食事がすんだあとも、深夜まで話がおよぶこともたびたびある。

ジョゼフ・ド・パルドンという名の、四十そこそこの独身男（貴族か）は、雑談の名人であった。秋色の濃い九月中旬のある日のこと、かれの

散歩の足は、モンマルトルの墓地へとむかった。墓地に行くと、心がやすまり、しんみりとした気分になるからである。もうひとつかれが墓地を好む理由があった。かつての恋人がそこに眠っていたからである。いとしい恋人の墓に詣でて立ち去ろうとしたとき、隣りの墓に喪服を着た金髪美人がひざまずき、すすり鳴いているのに気づいた。

その女は男に見られていることに気づくと、恥しそうに両手で顔をかくした。が、すすり泣きはいよいよいけない的になり、頭はだんだん墓石のほうに傾いていった。そのうちに意識を失い、うごかなくなった。主人公は女のそばに駆け寄ると、介抱してやった。女の夫はトンキンで戦死した陸戦隊の士官とのことであった。

その女は年のころは二十代といったところ。とても歩けない、というので手を貸してやった。女は主人公にもたれながらゆっくりと歩いた。葬儀のあと休息しに寄るレストランに入ると、二人は紅茶を飲んだ。そのあと馬車で女をそのアパートマンまで送ってやった。女の部屋は五階にあった。手を貸して欲しい、というので階段をゆっくり上っていった。戸口まで来ると、お礼を申しあげたいから、ちょっと中におはいりください、といった。

主人公はソファーにすわり、女の目を見ているうちに相手を抱きしめたいといった気がむらむらと起り、いきなり彼女を抱くと押したおし、キスの雨をふらした。女は抵抗を示さなかった。このあと二人は外に食事に出、それがすむと女の家へもどった。

墓地が奇縁となった二人の関係は、三週間ほどつづいた。が、やがて二人は別れた。一ヵ月後、主人公はあの喪服の女に再会したいとおもい、モンマルトルの墓地に出かけた。長い間、墓地の中を歩いていたら、喪服を着た一組の男女が目にとまった。男の方はりっぱな五十代の紳士。女は何んとあの女であった。主人公はびっくりした。女は主人公を見ると、一瞬顔をあからめたが、すぐウィンクをしてみせた。その表情は「知らない顔をしてね」か「また来てちょうだい」といっているようであった。

この女は墓地を稼ぎ場とする「ひっかけ屋」——私娼であることはたしかであった。

荷風はおそらく「墓地の女」をよんでいたものであろう。かれによると、小説にとつて大事なのは独創性であるという。他人の作をよんで、そこから思いついたことは避けるべきという。じぶんの経験から、じっさい感じたことを小説にすべきであるという。しかし、他人から得た着想をすべて否定しているわけではない。腹案ができたのち、他人の作を参考とするのはよいという（「小説作法」）。

荷風とモーパッサンの両作品は、個性の発現であることに変りないが、両方につき比べ、内容をしらべてみると、題材や構成や中味において

「近似」したものが感じられる。それは単なる偶然の一致なのか、それとも荷風に及ぼせる外来的影響なのか、はっきり断言はできないが、荷風は「墓場の女」を念頭に置きながら、「葡萄棚」を書いた可能性がある。すくなくとも荷風の精神は「墓場の女」に感興をうけ、無意識裡にこれを利用したとも考えられる。

\*

あとがき

筆者は少年のころに、永井荷風の名を知った。たしか預金通帳入りのカバンをタクシーの中に忘れ、それが出てきたといったニュースを、新聞記事か何かでよんだときである。いまから半世紀以上もまえの話である。やがて大人になり、『断腸亭日乗』をよみはじめ、ついで『あめりか物語』『ふらんす物語』をよむようになった。またこの間に『珊瑚集』【編】『ふらんす物語』『モオパッサン』【永井荷風 後藤末雄】などの初版のほか、小門勝二の私家版——月刊誌『散人』のバックナンバーなどを古書で求め、こんにちに至っている。

荷風については、これまでにさまざまの人がいろいろなことを書いてきた。かれがいちばん嫌ったのは、じぶんのことをよくもあしくも人に書かれることであつたらしい（小西茂也「荷風先生の生活」『早稲田文学』所収、昭和27・3）。だとすると、泉下の荷風も筆者のエッセイを目にして、さぞや立腹することであろう。

小西茂也は、昭和二十二年（一九四七）一月七日から翌年十二月二十八日まで、約二カ年間荷風を自宅に住まわせた。年少から敬愛していた荷風に昼夜親炙ししやできたことは生涯の大きなよろこびであった。小西はこの間、荷風の言行を大判の大学ノート四冊に記録したが、後日それを焼却した。しかし、その一端を書き留めておいた。その中にモーパッサンにふれた部分がある（小西茂也「同居人荷風」（現代日本文学大系24『永井荷風集（二）』所収、筑摩書房、昭和46・12）。

——近頃はモーパッサンのような短篇を書きたくて堪らぬとも云われる（昭和22・8・15）。

自分は二十代にはモーパッサンをエロ小説家と思ひおりしが、彼の本領は「靴」的な虐げられし人間の描写にあると、近頃は思ひおれり（昭和22・8・16）

昭和二十年代から三十年代にかけて、日本はまだ貧しかった。東京に住む大半の日本人は、粗末な食事をし、焼け跡や仮設住宅のような所で暮らしていた。大正九年（一九二〇）五月、荷風は麻布市兵衛町六番地の崖の上に約百坪の土地を借りて偏奇館を建てた。地主は広部清兵衛といった。借地料は一ヵ月約十八円であった。

地内には大きな椎の木（ぶな科の常緑高木）があり、崖下には竹林や町家（商人の家）、一般住民の家、かやぶき屋の家に加えて、ところどころに樹林もみられた。荷風はここに家を建てるまで、芝白金三光町や小石川金富町の売地を見てあるいたが、市兵衛町のこの高台がいちばん気に入ったようである。

昭和三〇年（一九五五）の秋日、荷風は知人と偏奇館跡を訪れ、崖の上から谷を俯瞰した。昭和三十年代初頭、筆者は市兵衛町二丁目のフィンランド大使館の裏手にある陋屋（ろうおく）でしばらく暮らしたことがある。そこは高台になっていて、坂道を下ると谷間があり、そこには上物のないコンクリートの基礎（土台）がいっぱいみられた。それは戦災による残がいであった。筆者の住居からさほど遠くない所に奇しくも荷風が住んでいたことを知ったのは、ずっとあとのことである。いまは旧市兵衛町は六本木と町名を変え、偏奇館があった崖はけずり取られ、そこに高層ビルが建っている。

荷風がかって『岨崖の眺望』と呼んだものは、ことごとく失なわれてしまった。……

#### 注

- (1) 小門勝二「最後の反俗作家 永井荷風の死とその周辺」、『サンデー毎日』、昭和34・5。
- (2) 『暁星百年史』（学校法人 暁星学園、平成元年十一月）、二七～二九頁参照。
- (3) 『東京教育史資料大系 第七巻』（東京都立教育研究所、昭和四十八年三月）、六〇九～六一〇頁。
- (4) 注(2)の二八頁。
- (5) 注(2)の二五頁。
- (6) 中鉢常正「向軍治先生の思い出」、『三田評論』（第六〇一号所収、昭和37・1）。
- (7) 生田葵山「永井荷風といふ男」、『文藝春秋』所収、昭和10・9。

- (8) 敵谷秀雄宛書簡(明治36・11・1付)。
- (9) 秋庭太郎『永井荷風伝』(春陽堂、昭和五十一年一月)、一一四頁。
- (10) 佐藤春夫『小説 永井荷風』(岩波書店、平成二十一年六月)、七二頁。
- (11) Karl Baedeker: *The United States with an excursion into Mexico*, Karl Baedeker Publisher, Leipzig, 1904, P.339
- (12) 敵谷季雄宛書簡(明治37・11・23付)。
- (13) 注(11)の三三九頁。
- (14) 新潮日本文学アルバム『永井荷風』(新潮社、昭和六十三年九月)、二四頁。
- (15) 西村恵次郎宛書簡(明治37・12・27消印)。
- (16) 武田勝彦『荷風の青春』(三笠書房、昭和四十八年三月)、一六五頁。この広告は『ニューヨーク・ヘラルド』紙の第一刷り二十二頁に記載されている。と同書にある。が、何度掲載紙を調べても見い出せなかった。日付ちがいか?疑問を呈しておく。
- (17) 西村恵次郎宛書簡(明治39・6・28付)。
- (18) 「メルモント・ホテル」については *The New York Herald* (『ニューヨーク・ヘラルド』紙、一九〇五・七・九付)に、つぎのような広告が載っている。

#### HOTEL

BELMONT, near Broadway

116, 118 west 45<sup>th</sup> ST.

Special Summer RATES

NEW FIREPROOF HOTEL

For permanent and transient guests:

European Plan

Private dining rooms.

R. L. BARRICK, Proprietor

ベルモント・ホテル

ブロードウェイに近い西四十五丁目

一一六、一一八番地。

特別の夏季料金あり。新耐火性ホテル。

長期および短期滞在者のためのホテル。

ヨーロッパ方式（注・食事は別勘定）

個人用食堂あり。

所有経営者は、R・L・バリーック。

- (19) リヨンは霧の多い町であった、と荷風は語っている（「仏蘭西の追懐」）。ソヌとローヌの二つの川からたちのぼる水気が凝って（「カ所にあつまる——引用者 白いヴェールとなり、フウルヴェイェルの丘の中腹から市街全体をおおひ包む、という（吉江喬松「秋」『仏蘭西文藝印象記』所収、新潮社、大正十二年五月）。また一カ年の研究休暇を得、リヨンにおける荷風について精査して書き上げた述作に、本学社会学部教授・加太宏邦氏の『荷風のリヨン』『ふらんす物語』を歩く（白水社、平成17・2）や、荷風のニューヨーク時代を調べた論文に「荷風の周縁世界編制——銀行時代の荷風をめぐる」、『法政大学多摩論集』（第27号、平成23・3）などがある。
- (20) 昭和三十九年（一九六四）に日本大学が購入した荷風書簡に、このホテルの住所がみられる。
- (21) 注（7）にある。
- (22) 秋庭太郎『新考 永井荷風』（春陽堂書店、昭和五十八年三月）、七四頁。
- (23) 小門勝二の私家版——月刊誌『散人』（昭和36・6、第二冊）を参照。
- (24) 谷崎潤一郎宛書簡（昭和19・12・22付）。
- (25) このホテルは市兵衛町二丁目にあった。An Official Guide to Japan, The Japanese Government Railways, Tokyo, 1933, p.16 にある「ファミリーホテル」（「家族割引ホテル」とある。